ふじみの



Copyright ©1998 by Akira Matoba Published by P•I•E Books

No.37

東京農大畜友会

巻頭言

畜産学科長
畜友会々長　大谷　忠

新世紀最初の卒業生の皆さんと、難関を乗り越えて農学の門に入られた新入生の皆さんに心からおめでとうを申しあげます。

先ず、卒業生の皆さん、中国に「堂に升り、室に入る」の故事名言があります。「堂に升る」は学問や技術が一応の腕前に達している、「室に入る」はその奥義に達しているという意味です。大学四年間で得た知識と技は一般社会の専門分野では初歩的な基礎学問に過ぎないと思って下さい。決して達人に成っているわけではありません。得た基礎知識をしっかりと磨いてあなた方の進む道で頑張って下さい。

さて、新入生の皆さんには、「虎を描きて、犬に類す」を申しあげます。この意味はもうお分かりでしょう。高い望みを持つのは結構ですが、「努力をせずに高望みをすると失敗する」

という名言です。本学は一年次の初めから専門科目を学ぶようになっています。皆さんはそれぞれ目的意識を持ち入学されたのですから、これから始まる多くの講義を慎重に受けるよう期待しています。

我々人類は、地球レベルの多くの問題をかかえて二十一世紀を迎えました。前世紀後半の驚異的な科学の進歩とともに、生活水準は向上し、安定した豊かな生活が送れるようになりました。その反面、種々の環境破壊から気象異変、動植物の異常な生理・生態学的変化など、この先、想像もできない問題が起こるのではと危惧する今日です。わが国の畜産界にも多くの問題を有しておりますが、この解決は若い皆さんの力と勉学そしてその成果にかかっております。先輩、後輩ともども、二十一世紀に期待される新しい学問の幕開けの第一歩として頑張ろうではありませんか。

終りにあたり、本誌において数々の原稿をお寄せいただき、また編集の労をとられた関係各位に感謝申しあげます。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　登　健太

厚木キャンパスに春の匂いが感じられ、心地良い季節となりました。今年も「ふじみの」第37号を発刊することになりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告等を記載しています。今年は農学部が厚木キャンパスに完全に移転し、新たなスタートを切りました。決してゴールの見える様なものではありませんが、その中で学生一人一人が感じた「希望」、「努力」、「不安」などの文章が載せられています。ぜひ、隅々までご高覧いただけたら幸いです。

ふじみの　目　次

巻頭語　大谷　忠

ふじみの発刊にあたり　3年　登　健太

同窓会だより

同窓会長あいさつ　伊藤　澄麿

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会の紹介　渡邉　誠喜

研究室だより

家畜繁殖学研究室
家畜飼養学研究室
家畜学研究室
畜産物利用学研究室
家畜育種学研究室
家畜生理学研究室
畜産衛生学研究室
野生動物学研究室

退職にあたり

農大と共に歩んだ半世紀　田中　一栄

ふじみの寄稿原稿

厚木キャンパスに移転してきて　祐森　誠司
畜友会諸君　半澤　恵

集う学友

農業実習に参加して　4年　内田　弥生
大学卒業、この先の不安　4年　佐々木　大
彼女に届け！この想い　3年　齋藤　常浩
私の学生生活　2年　山本　美和
畜友会　1年　桐生　茂昌

畜友会だより

平成十二年度畜友会事業計画
平成十一年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成十二年度畜友会予算
特別会計予算
平成十二年度畜友会役員
第一回厚木キャンパス収穫祭事業報告
第一〇九回世田谷キャンパス収穫祭結果報告
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第一回厚木キャンパス収穫祭・
第一〇九回世田谷キャンパス収穫祭各部門委員長より

『道産子物語』
―どさんこストーリー―
統一本部委員長　3年　登　健太
やりたいコト楽しむコト無限大∞
前夜祭・特別企画委員長　3年　鈴木　明子
二年目の宣伝隊
宣伝隊隊長　3年　三谷　直子
神輿
神輿隊長　2年　須藤　稔太
体育祭バンザイ
体育祭委員長　3年　渡邊　靖仁
『収穫祭』
櫓装飾委員長　3年　合田　恵子
装飾活動を終えて
講義棟アート・
北門装飾委員長　3年　岡　阿有美
家畜苑にありがとう。
家畜苑委員長　3年　伊藤　立

編集後記

3年　飯田　京

同窓会だより

同窓会長あいさつ

畜産学科同窓会
会長　伊　藤　澄　麿

畜産学科は、昭和二十四年に千葉県茂原において千葉農学部畜産学科として設置され、昭和二十八年に第一回の卒業生を世に出して以来、今日（平成十一年度・第四十八回）までに、延べ六、一六四名の同窓生が、国の内外を問わず、畜産業ならびに関連産業界においてそれぞれ活躍されております。

畜産学科同窓会は、畜産学科の創立四十周年を迎えるに当たり、昭和六十三年十一月に設立されました。その目的は、会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することであります。会員の皆様のご協力により着々と左記のような事業を展開しています。

一、畜産学科への援助
二、新入会員および卒業祝賀会への援助
三、会員名簿の追補版の発行
四、同窓会報の発行
五、総会および親睦会の開催
六、役員会および常任幹事会の開催

特に、本年度は厚木キャンパスへの移転の年であったことから畜産学科の変遷や新たに開設した厚木キャンパスの紹介を兼ねた「同窓会報第四号」を発行し、会員の皆様に発送いたしました。

四年生の諸君は、卒業と同時に同窓会の会員となられる訳であります。どうか、畜産学科で学び成長されたことを生涯の絆として各界で活躍されることをお祈りします。また、同窓生諸氏の連携を密にされ、親睦などを図るケルンとして同窓会を活用していただきたいと思います。

準会員ともいうべき新入生・在校生は、「同窓会」を多いに活用され、その恩恵を受けていただき、勉学ならびに課外活動に全力投球され幅広い人格を形成され悔いのない学生生活を送ってください。

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会の紹介

東京農業大学畜産振興会
会長　渡　邉　誠　喜

三十数年慣れ親しんだ世田谷キャンパスから厚木キャンパスへと移転して、初めての畜友会誌「ふじみの」が発行されるに際し、その誌面を借りて東京農業大学畜産振興会について厚木キャンパス設置以降の活動を振り返りながら紹介させて戴きます。

本会設置の目的は東京農業大学農学部畜産学科および同大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資することにあり、平成三年三月二十三日にスタートしています。会の運営に遺漏のないように役員として理事・監事が選任され、理事会で必要事項は審議決定され、役員以外の評議員においても評議員会で決定内容について承認を得ることとなっています。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生の表彰が毎年二～四年の各学年から三名、優秀卒業論文表賞が毎年一名、さらには学生による学会発表、学術論文の発表に対しては毎年若干名の表彰を行っています。とりわけ、学生の学会等での発表は年々増加しており、経理担当理事もうれしい悲鳴を上げる状況となり、ますます本会の存在意義が高まっています。また、厚木キャンパスに学生を受け入れる年から発行致しました本会の機関誌もこれまでに三巻となっています。

厚木キャンパス開設時には教員も常駐せず、さらには動物好きな学生が集ってくれたにも関わらず、手の届く範囲に動物がいないという状況であったことから、初年度は乳牛（雌）一頭を、翌年度はラマの一番を、そして今年度は黒毛和種（雌）の素牛を一頭新入学生へのプレゼントとして寄贈して参りました。今年度は、初年度に寄贈した乳牛が子牛（二世）を出産し、生乳の生産段階にはいりました。ラマ達も卒業論文の対象動物として利用されたり、第一回厚木キャンパス収穫祭の家畜苑に参加し、人気者となっています。その他にも、厚木キャンパスにおける課外活動の助成も行って来ました。

逐次拡大してきたこのような事業に対する資産は

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
二　賛助会員会費
三　一般寄付金
四　その他の収入

となっていますが、現今の社会的経済不況により、向学心旺盛な学生への奨学金の貸与も重要な事業となって

います。

卒業生には本会の趣旨を理解され、後輩達育成のためにご支援を賜りたくお願い致しますと共に、在校生諸君は本会の目的に叶う事柄が生じた祈りには本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念致します。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

我等、家畜繁殖学研究室は、畜産経営上最も重要である優秀な形質をもつ家畜・家禽をいかに効率よく増やすかを最大の目標とし、そのために必要な基礎知識や技術若しくは応用技術を身に付けるため、百目鬼郁男教授をはじめ、門司恭典助教授、佐藤光夫講師、小川博助教授、桑山岳人講師の御指導の下、恵まれた環境の中で大学院生7名、4年28名、3年生28名の室員全員が自覚と誇りを持ち、そして、それぞれの夢に向って互いに協力し合い、日々活発に取り組んでいます。

目標に掲げた優良家畜の繁殖率の向上を目指し、当研究室では先ず、精子形成・排卵・性行動・受精・着床・妊娠維持・分娩・泌乳・母性行動とあらゆる面からの繁殖現象に関わるホルモンについての解明又は、精液・卵子・胚の凍結保存法、体外受精卵の受精から卵の発育までの培養等、先端技術での研究にも取り組んでいます。近年においては、環境ホルモンについての研究も進められ、研究室内は、自信と希望に溢れかえっています。

3年生においては、当研究室で飼養管理しているシバヤギ・ミニチュアブタ・鶏とそれぞれの班に分かれ、日常の飼育・管理をするとともに、繁殖学に関する基礎知識や実験方法・その技術も身に付けるため、大学院生や4年生の実験の補助などにつき、個人を高め目標に向って活動しています。

今後も、当研究室では、目標に一歩でも近づけるよう、不撓不屈の精神でこれからの繁研生活を爆進していきたいと思っていますので宜しくお願い致します。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
石塚　弘晃	長期休産鶏における卵巣機能の回復について	桑山 小川
井上　将志	妊娠期におけるDES投与がミニチュアブタ母体の血中性ステロイドホルモンに及ぼす影響	門司 百目鬼
井上　恭典	乳牛の牛群検定による繁殖成績の解析と泌乳量およびBCSとの関係	佐藤 桑山
今井　裕子	マイクロドロップレット法によるブタ成熟卵子の凍結保存	百目鬼 門司

岩崎美帆子　GnRH製剤を用いた雄ミニチュアブタにおける造精機能促進法の検討　門司　百目鬼
岩本伯留佳　肉牛における1日1回給餌による日中分娩誘起とその後の繁殖機能回復について　佐藤　百目鬼
上野　顕士　ホロホロチョウの卵殻形成機構に関する研究　小川　桑山
上東　美宝　肉牛の繁殖障害への灸治療法の利用について　百目鬼　佐藤
鵜沢　千春　雄ニホンウズラの血中テストステロン濃度の日内変動　桑山　門司
遠藤　正道　シバヤギにおけるPMSG投与による多排卵誘起処置法　百目鬼　門司
大西　啓太　雄ウズラの生殖機能に対するエストロジェン投与の影響　桑山　門司
勝又　瑞穂　抱卵中の母鶏に対する絶食処理が抱卵行動と卵巣機能に及ぼす影響　桑山　小川
久下　壮　ミニチュアブタにおけるホルモン剤を用いた発情周期の同期化　百目鬼　門司
工藤　大輔　ブタ体外成熟卵子における活性化処理条件の検討　門司　百目鬼
須貝　治実　情報技術(IT)と日本の酪農　桑山　百目鬼
鈴木　淳　雄シバヤギ血漿中テストステロンおよびデヒドロテストステロンの酸素免疫測定法の検討　百目鬼　桑山
高城　啓　アロマターゼ阻害剤を投与した雄シバヤギにおける造精機能および性ステロイドホルモン濃度の推移　百目鬼　門司
高橋　綾子　ブタ体外受精に用いた凍結保存精液の個体差の検討　門司　百目鬼
舘　傑　ミニチュアブタにおける尾静脈採血法の検討　百目鬼　門司

外山　学　アロマターゼ阻害剤投与が雄シバヤギの精巣組織に及ぼす影響　門司　百目鬼
中山智香子　孵卵中の初期胚へのエストラジオールベンゾエイトの投与が胚の発育に及ぼす影響　桑山　門司
中山裕美子　孵卵中の初期胚へのジエチルスチルベステロールの投与が胚の発育に及ぼす影響　桑山　門司
山口こずえ　乳牛におけるBCS測定法の改良とその効果について　佐藤　百目鬼
大瀧こず恵　PGF2α投与によるシバヤギの分娩誘起について　百目鬼　門司
松尾亜佐子　ミニチュアブタの性成熟期前後における血中性ステロイドホルモン濃度の測定　門司　百目鬼
美留町咲子　マイクロドロップレット法による凍結保存が成熟段階の違うブタ卵子の生存性に及ぼす影響　百目鬼　門司
山路　有香　凍結保存法の相違によるウシ体外成熟卵の生存性の比較　百目鬼　門司
内田　弥生　シバヤギの腟内留置型プロジェステロン製剤（CIDR）による発情の同期化　百目鬼　門司

家畜飼養学研究室

生産物を提供してくれる家畜、共に生活するコンパニオンアニマル、同じ水・空気を分かち合いつつも滅多に顔を会わすことがない野生動物、どの動物も生きていく上で欠かすことのできないものが、飼料・食物です。本研究室は動物が幸せな時間を過ごせるように、どんな飼料を（飼料学）どれくらい（動物栄養学）どうやって（家畜管理学）与えるかを常に追求しています。これらの妥当性を判断する知識として各動物の行動の意味（家畜行動学）を理解し、さらには与えた飼料の最終形態（糞尿）（畜産環境保全論）についても考えねばなりません。これら全ての知識を応用した学問が家畜飼養学です。

研究は、伊藤澄麿教授、栗原良雄教授、祐森誠司助教授の指導の下、進めており、成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本ペット栄養学会等の大会に毎年発表されています。本年度の卒論のテーマは別記の通りです。研究室の活動は、春の富士農場での専攻実習と新室員歓迎会に始まり、夏期の家畜管理実習（学外）、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加（模擬店：カレーうどん、文化学術展：ペットを飼うということは）、研修旅行、卒論発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と盛り沢山ですが、三年生、四年生がそれぞれ自分達の役割を果たせるように助け合って、家族のように楽しく過ごしています。先生方の指導も厳しい時もありますが、反面、時には料理の腕前を振るったり、マイクを握り熱唱したりと普段とは違う一面がみられます。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
		指導教員
新井　崇人	低温飼育環境がブロイラーの体組成に及ぼす影響	栗原　祐森
五十嵐隆太	富士畜産農場圃場における牧草の生長、収量および養分収量2、3番草（3年目）	栗原　池田
池田　伴行	肥育期間における歩行運動（1日3㎞）がデュロック種の肉質に及ぼす影響　特に化学的性状について	伊藤　鈴木
岩田　愛	DL-メチオニンの飼料への添加が子豚糞尿中の窒素量に及ぼす影響	栗原　祐森

上江洲愛夜	富士畜産農場圃場における牧草の生長、収量および養分収量　1番草（3年目）	栗原　池田
緒方　崇志	給与飼料の硬度がブロイラーの嗜好性に及ぼす影響	栗原　祐森
奥田　貴男	ラマの反芻行動に関する研究	伊藤　祐森
小那覇安朗	ブロイラー用飼料の硬度に関する研究	栗原　祐森
金子　知史	肥育期間における歩行運動（1日3㎞）がデュロック種の肉質に及ぼす影響　特に物理的性状について	伊藤　鈴木
小林　忠幹	ガス分析型呼吸試験装置の性能について	栗原　祐森
小林　則子	パックサイレージにおける貯蔵期間が品質に及ぼす影響	栗原　池田
榊原　夕紀	パックサイレージにおける貯蔵期間が化学成分に及ぼす影響	栗原　池田
佐古　健	ラマの胃の光学的観察	伊藤　祐森
佐々木　大	コーヒー抽出残渣による牛糞由来臭気の消臭メカニズムについて	栗原　伊藤
高田　直樹	低温飼育環境がブロイラーのエネルギー代謝に及ぼす影響	栗原　祐森
玉川　智義	草食獣の糞にみられる非水溶性未消化物の光学的観察	伊藤　祐森
得能　樹之	食糞阻止した幼兎の成長に対するビタミン添加の効果	栗原　池田
豊田　亮	栄養水準の相違が家兎の精液性状に及ぼす影響　特にビタミンについて	栗原　祐森
黒澤　亮	盲腸摘出ラットの食糞行動に関する研究	祐森　池田

千葉　純子　制限給餌が家兎の精液性状に及ぼす影響　栗原　祐森

白石　明子　食糞行動阻止幼兎に対する給与飼料中ビタミンの有無が消化管の状態ならびに消化管内容物の化学組成に及ぼす影響　栗原　池田

伊藤洋一郎　野球選手のトレーニング法―大リーグ及び日本の野球選手について　久能木　伊藤

臼井　直哉　首都圏近郊（西部）におけるペットショップの取扱い飼料について　伊藤

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、荻原國威講師、西脇充講師の3名の先生の御指導のもとに、4年次生29名、3年次生28名、計57名の室員で日々の研究活動を行っています。

本研究室では、国内外の実習・調査を通し、家畜生産現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察し、それらに係わる研究を行っておりますが、家畜・家禽・産業動物・草地・環境保全など、研究内容は畜産全般にわたっております。

現在の主な研究課題は

・魚介類由来極性脂質が家禽に及ぼす影響に関する研究
・ダチョウの管理に関する研究
・乳用緬羊の管理に関する研究
・畜産をとり入れたアグリツーリズムに関する研究
・有機物資源の堆肥化に関する研究

などを行っております。

その他に、年間行事として、新入生歓迎会・研修旅行・納会・月2回の定例会などと各研究班によるゼミがあります。まだまだ設立されたばかりで、他の研究室のようにスムーズには進まない面も多々ありますが、室員全員で形を模索しつつ、日々楽しく活動しております。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
綾戸　量	ヒナを用いた魚粉由来未知成長因子の簡易検定法の研究	西脇　萩原
出澤　裕子	日本における緬羊飼養の変遷と今後の展開について	大谷
岡田　怜子	埼玉県下における酪農の現状と今後の課題	萩原　西脇
小川　美穂	我が国における牧羊犬について	西脇　萩原
柏木麻里子	乳用緬羊の飼育に関する現状と問題点	大谷
加藤　直史	牛・鶏等の異種家畜糞の混合堆肥に関する研究	大谷
嘉屋　亮治	千葉県における酪農の歴史と酪農事情の課題と対策	萩原　西脇
三枝　修	河川敷野草を副資材とした鶏糞混合の堆肥調製方法	大谷
清水　裕行	魚介類原料別における極性脂質混合物給与がブロイラーの成長に及ぼす影響	西脇　萩原
白石　直子	ダチョウ種卵の孵卵経過に伴う環境細菌の推移について	西脇　渡邊
杉本　妙子	魚介類由来の極性脂質混合物給与がブロイラーの生産性に及ぼす影響	西脇　萩原
杉本　牧	草地型酪農の成立条件に関する調査研究	新井　大谷
田中　達磨	魚介類原料別における極性脂質混合物給与がブロイラーの成長に及ぼす影響	西脇　萩原
樽見　潤	家畜単一糞と混合糞が堆肥化中に生ずるガス発生量について	大谷

伝幸あんな　水分調整材の混合割合による馬糞堆肥の調製方法に関する研究　大谷

中山　真紀　魚介類由来極性脂質の抽出と分画　西脇

根津　淨子　伴侶動物の飼育経験について　西脇

伯井　裕子　農業高校の生徒における農業に関する意識について　萩原　西脇

早川　雅人　家畜異種原料混合堆肥調製方法に関する研究　大谷

日向野桃子　ミャンマーの畜産事情について　西脇　荻原

彦坂　晶　魚介類由来の極性脂質混合物給与が産卵鶏の生産性に及ぼす影響　西脇

福山　英正　フライスランド種系における子緬羊の発育に関する基礎的研究　大谷

前田　奈美　ダチョウ種卵の孵化率に影響する要因の検討　西脇　渡邊

宮入　真太　ハーブ飼料給与がブロイラーの成長並びに肉質に及ぼす影響　西脇

村口都志雄　秋田改良種の成長並びに肉質に関する研究　大谷

森　奈美　ダチョウ卵およびダチョウ肉の嗜好性　西脇　萩原

八谷　絢　モンゴルのハンガイ地域における草原維持機能と放牧技術に関する研究　大谷

横山由美子　家畜糞並びにその混合資材を用いて調製した堆肥の品質　大谷

畜産物利用学研究室

本研究室では室長の山中良忠教授をはじめ、高橋強客員教授、古川徳教授、松岡昭善教授のご指導のもと、大学院生2名、研究生1名、4年次生23名、3年次生27名の室員で構成されており、それぞれ活発な活動を行っています。

具体的には、乳・肉・卵中に含まれる各種成分の化学的、物理学的特質ならびに栄養、生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追求し、食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発に取り組んでいます。

年間の主な活動としては、週1回の食品に関するゼミナール、新入生歓迎会、乳酸飲料の製造実習、プリンの収穫祭での販売、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
池田　貴司	原料乳の均質化と固形分濃度がヨーグルトの品質に及ぼす影響	古川
浦木　妙子	乳酸菌の腸管接着因子に関する研究	古川
岡崎　智子	乳酸菌の接着に関与する腸管細胞表面因子に関する研究	古川
小高　露美	MφのNBT還元能に及ぼす乳酸菌摂取の影響	古川
小林　千晶	MφのNO産生能に及ぼす乳酸菌摂取の影響	古川
後藤　貴志	*Enterococcus faecium*を用いた発酵ソーセージの製造に関する研究	松岡
後藤　麻希	卵黄不溶性画分中のレクチン様物質に関する研究	古川　山中

佐藤　愛子　卵アレルギーに関する基礎的研究　山中　古川
平亜　由美　アルコール含有発酵乳の経口摂取がMφ活性に及ぼす影響　古川
高藤　彰　発酵豆乳中の酵母の同定　山中　古川
高畠　昇　繁殖用雌豚肉の化学的並びに物理的特性　松岡
生井　仁　味付け卵の保存期間延長法に関する研究　山中　古川
行木　達哉　青黴チーズ製造に関する基礎的研究　古川
原　琢磨　家禽肉の脂質組成に及ぼす加熱処理の影響　松岡
平野　良和　生ハム熟成中の脂質組成の変化　松岡
藤村　和貴　RAPD法による食肉の肉種鑑別　松岡
矢内由美子　高血圧ラットにおける発酵乳の血圧低下効果　古川
山越　信哉　脾臓細胞のマイトジェン活性に及ぼす乳酸菌産生物質の影響　古川
古川　祐二　秋田白色種兎のと体形質並びに肉の化学的組成　松岡　山中
若林　裕司　畜産物の脂溶性成分がヒト乳癌細胞に及ぼす影響　古川　松岡
岩澤　亮子　乳酸菌産生物質のアンジオテンシンI変換酵素活性の抑制について　古川
深田　昌希　粘質物生産菌を用いて製造したヨーグルトの品質　古川
鈴木　信晴　酒粕漬生ハムの品質に及ぼす粕漬熟成期間の影響　松岡
楠　泰寿　生産者組織による牛乳の販売戦略―低温殺菌牛乳と地場流通の試み―　新井　山中

茂木　秀俊　ハーブ類の東京市場における出荷動向　市村　山中
吉川　知孝　果実類の低温保蔵に関する研究―凍結保存について―　松本　山中
佐藤雄一郎

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、血清学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、田中一栄教授をはじめ、天野卓教授の指導の下、野村こう講師、大学院生10名、研究生1名、4年生26名、3年生27名によって構成され、室員各自の自覚と互いの協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては電気泳動による血液蛋白型の研究・モノクローナル抗体を用いた赤血球抗原に関する研究・在来家畜の遺伝学研究・組織適合性抗原遺伝子のDNA解析などが行われています。

研究室での日常の活動は実験動物の管理、毎週行われているセミナー、定例室員会、卒業論文などの研究、実験における問題点を解決するための討論などです。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生による、学会発表や学生による他大学や他の研究機関での研究を行っています。

研究室における主な年間行事は、新室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒論発表会などがあります。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
荒木　太郎	ウシ赤血球抗原の免疫遺伝学的研究—特にF'抗原について—	田中　野村
猪狩あゆみ	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
片桐　智企	ウシ赤血球抗原の免疫遺伝学的研究—特にA_2抗原について	田中　野村
小島　治果	血液蛋白型支配遺伝子からみたウシとヤクの遺伝的関連性	天野　野村
小林　徹也	ウシ赤血球抗原の免疫遺伝学的研究—特にFc dose抗原について—	田中　野村
下坂　明弘	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
鈴木舞衣子	血液蛋白型支配遺伝子からみた家畜牛集団の遺伝的関連性	天野　野村
世古　祐介	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
高井　直史	ミトコンドリアDNA Cytochrome b領域からみた家畜牛集団の遺伝的関連性	天野　野村
田島　大輔	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
田島　久子	ヤギMHC領域に関する遺伝学的研究	天野　野村
玉置美奈子	肉缶詰の製造に関する基礎的研究—ラム肉缶詰の製造—	天野　鈴木
中山　史	ヤギの毛色支配遺伝子に関する研究	天野　野村
長岡　建史	肉缶詰の製造に関する基礎的研究—鹿肉缶詰の製造—	天野　鈴木
西村　憲悦	肉缶詰の製造に関する基礎的研究—エミュー肉缶詰の製造—	天野　鈴木

西山　徹	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特にバリ系牛について—	天野　野村
疋田　幸司	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
槇野幾太郎	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特にウシ、ヤクおよびその雑種について—	天野　野村
松本　公平	ミトコンドリアDNA D-loop領域からみた家畜牛集団の遺伝的関連性	天野　野村
儘野由香里	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特に韓牛について—	天野　野村
美多　陽介	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特にモンゴル在来牛について—	天野　野村
森　貴也	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特にゼブー系牛について—	天野　野村
山根光一朗	ヤギの毛色支配遺伝子に関する基礎的研究	天野　野村
芳中　正毅	ヤギのマイクロサテライトマーカーに関する研究	天野　野村
脇坂　将	ウシミトコンドリアDNAの遺伝学解析—特にヨーロッパ系牛について—	天野　野村
渡辺　圭太	ヤギ赤血球抗原の免疫遺伝学研究—特に凝集素について—	田中　野村
澤西　彩子	ウシ赤血球抗原の免疫遺伝学研究—特にV_2抗原について—	田中　野村
井野　靖子	ヤギ赤血球抗原の免疫遺伝学研究—特に溶血素について—	田中　野村

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は、渡邉誠喜教授をはじめ、半澤恵助教授、吉田豊講師の御指導のもと、大学院生5名（うち1名がタイからの留学生）、学部4年次生23名、3年次生26名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理的機構の遺伝的支配に関する研究が行われており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究、③ウシに関する研究、④ラマ等その他の動物に関する研究、に大きく分けられます。

①においては、運動生理上の赤血球の変化、造血幹細胞の培養と培養赤血球の成熟過程、生体内機能に関する免疫学的・血清学的解析、馬腫瘍由来細胞の株化に関する研究などが行われています。②においては、各種動物の組織適合性複合体（MHC）に関する分子遺伝学的・免疫学的解析、血液型の解析、ゲノムDNA解析、免疫器官における免疫担当細胞の動態に関する研究などが行われています。③においては、ウシの肉質改善のためのビタミンAに関連する諸々な現象に関する内分泌学的な研究が行われています。④においては、高温環境がニホンウズラに及ぼす影響に関する研究、ラマの血液成分の解析、各種鳥類のDNAによる性判別などが精力的に行われています。

研究室における日頃の活動は、3年次には生理学に関する基礎的な知識や実験の技術を身につけるために実験実習・講義・ゼミが課せられていると共に、学生は実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には、前述した研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っております。留学生を含む院生は自分の学位論文のテーマに則り、日夜研究に精励し、その結果を学会等に発表しています。

年間の主な行事として、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
稲村　英将	家畜に対する音楽の効果	指導教員 渡邉 吉田
今井　尚志	I-Uターンによる畜産就業者の意向調査と畜産業の将来展望	渡邉 吉田

岩崎　悠司	ウズラにおける母子間抗体（IgG）の移向並びにヒナの抗体産生能に対する移行抗体の影響	渡邉 半澤
大浦　聡	ウマアルギナーゼ遺伝子の解析	渡邉 半澤
大松　洋一	分娩前後における黒毛和牛の血中レチノール濃度の変動について	渡邉 吉田
大矢　康貴	抗・牛レチノール特異的結合蛋白質抗体を用いたアフィニティークロマト法によるRBPの精製並びに牛血清中レチノール濃度の免疫学的定量	渡邉 吉田
岡田　耕二	SDS-PAGE電気泳動による牛レチノール特異的結合蛋白質の精製並びに牛血清中のレチノール濃度の免疫学的定量	渡邉 吉田
小池　洋平	鳥類における性マーカー遺伝子のシークエンス解析	渡邉 吉田
坂本与志弥	コスミドを用いたウマ癌抑制遺伝子（p16遺伝子）のクローニング	渡邉 半澤
佐藤　敦	ニホンウズラMHC領域内の反復配列解析	渡邉 半澤
佐野　恵子	In vitro培養によるウマ抹消血由来赤血球系幹細胞の遺伝子発現（ヘモグロビン）	渡邉 半澤
渋谷　智恵	ニホンウズラのMHC class II遺伝子のサザンハイブリダイゼーションによる解析	渡邉 半澤
龍田　栄二	ニホンウズラの血清中IgG濃度の系統間差異の解析	渡邉 半澤
田村　恵	食肉の流通構造の変化についての研究	渡邉 藤島
仲　広樹	ニホンウズラのゲノミックDNAの反復配列：C500、C800のシークエンス解析	渡邉 半澤

西村　哲也　ウマメラノーマ細胞における癌抑制遺伝子（p16）発現解析　渡邉　半澤

野原　徹　マイルカ科動物と家畜の血液蛋白質および酵素の特性の比較　渡邉　半澤

矢内　潤　牛甲状腺並びに肝臓実質細胞の牛レチノール特異的結合蛋白質の精製並びに免疫組織学的解析　渡邉　吉田

横田　真吾　東京農業大学馬術部軽種馬のトレーニングに伴う血液性状の変化　渡邉　半澤

吉ノ元喜科　ニホンウズラのMHC class Ⅱ遺伝子のSSCPによる解析　渡邉　半澤

大内　康博　ニホンウズラのMHC領域コスミドクローンのシークエンス解析　渡邉　半澤

青山　芳郎　クジャクとニワトリの属間雑種個体臓器の免疫組織学的解析　渡邉　吉田

村田　健　テロメア長とテロメレース活性化時期の相関に関する研究　渡邉

家畜衛生学研究室

我が家畜衛生学研究室は、室長の近江助教授をはじめ、渡邊助教授、鹿江嘱託教授、東客員教授の御指導のもと、大学院生二名、四年生二十六名、三年生二十九名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、牛班、豚班、実験動物班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生でありましたが、最近では「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（ペット）の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では、模擬店で「しし汁」を出店し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会等があり、室員の団結を深め、各々が、目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行っています。

なお、平成12年の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成12年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
有田　華子	厚木キャンパス内飼育山羊の内部寄生虫卵保有状況	近江　渡邊
一柳　茂寛	産卵養鶏場におけるサルモネラ浸潤調査	渡邊　西脇
岩月　繁典	山羊に寄生を認めた外部寄生虫の駆除法について	近江　荻原
上坂　里奈	厚木市近郊飼育豚における肝白斑の発生状況について	近江　鈴木
臼田　靖	犬における血中ミクロフィラリアの検出法について	近江
大石　志野	乳房に腫瘤を認めた山羊の臨床病理的考察	近江　渡邊
景山　隆紀	豚サーコウイルスに対する複合次亜塩素系製剤の殺ウイルス効果	渡邊
香月　絵里	鶏伝染性気管支炎ウイルス長期保存株の病原性について	渡邊
菊地　晃	ダチョウ飼育施設における環境細菌のモニタリング調査	渡邊　西脇
木村裕一郎	患畜由来臨床材料の細菌学的検査	鹿江　渡邊
染谷　将洋	消化管内寄生虫卵保有犬における駆除剤投与後の臨床的観察	近江
高橋　伸一	ブロイラー養鶏場におけるコクシジウム症予察調査	渡邊　西脇
竹本　梓	削痩を主症候とするビーグル犬の臨床的観察	近江
多胡　匡人	山羊に寄生を認めた外部寄生虫の顕微鏡的視察	近江　荻原
千葉　珠美	動物園の衛生管理に関する研究　特に排泄物の処理について	近江　渡邊

中山　裕二　肉牛生産農家における呼吸器疾患の発生状況　近江　渡邊

長澤　亜弥　伴侶動物（犬）のアレルギー性皮膚疾患に関する文献的考察　近江　西脇

西尹　裕樹　豚の扁桃から分離された菌種の16S rRNA塩基配列による同定　渡邊

林　昌志　子豚の下痢と豚舎構造の関係について　近江　鈴木

平山　正幸　回虫駆除剤投与豚における肝白斑の発生状況について　近江　鈴木

堀内晋太郎　伴侶動物（犬）の消化管内寄生虫に対する駆除試験　排出虫卵、虫体による効果判定について　近江　西脇

目黒　隆之　痒覚を主症状とする豚の皮膚疾患における診断法の検討　近江　鈴木

矢島　麗　スフィンクス皮膚の微生物学的検査　鹿江　渡邊

矢野美由紀　豚回虫卵の培養に関する研究　培養液の濃度について　近江　鈴木

行山　貴子　哺乳動物由来株化細胞継代が鶏病ウイルスの病原性に及ぼす影響　渡邊

吉田亜久里　痒覚を主症状とする豚の皮膚疾患に対する治療法の検討　近江　鈴木

今中　洋平　精製FPCの抗コクシジウム効果　渡邊　西脇

野生動物学研究室

本研究室は吉行教授、河野教授の御指導のもと、室員がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。

地球上に存在する生物は地球環境の変化によって生存が左右され、人類を含む生物に対してこの変化は脅威となっている。そこで本研究室は動物の種の保存、人と野生動物の共存を目指し日々研究を行っている。

これらの研究を行うにあたって、我々は2つの方向から追及している。一つには野生動物の分類や行動、生態の研究といった動物学的追求であり、フィールド調査（サンプルの捕獲や行動観察等）と飼育下における研究が主となっている。もう一方では、生殖細胞の操作や遺伝子発現の解析などといった発生学的見地からの研究を行っている。

野生動物としてネズミやコウモリなどの小型哺乳類、ムササビ、リスなどの中型哺乳類、サルなどの大型哺乳類を、動物園の動物としてゾウ、ペンギン、エトピリカなどならびに近年日本の生態系に影響をおよぼしている帰化動物、実験動物としてマウスなどを研究の対象として扱うことにより、生態学、行動学、発生学の両面から本研究室の目的を追求している。

新井　謙一　飼育下におけるアカネズミとヒメネズミの行動について　吉行

尾崎　藍　マーモセットの人工繁殖～ホルモン測定によるモニタリング～　河野

笠原　俊次　アブラコウモリの夏期における多摩川での生態及び冬眠期の観察　吉行

片柳　晴絵　元競走馬の行動と心理に関する研究―環境に対する順応性―　吉行

勝澤由紀子　マウスゲノムにおける新規インプリンティング遺伝子の探索　河野

金子　恵　飼育下におけるアジアゾウの行動について　吉行

亀田　圭太　元競走馬の行動と心理に関する研究―環境に対する順応性―　吉行

木元　真悟　ES細胞からのClone Mouseの作出　河野

小宮　一仁　飼育下におけるエトピリカ抱卵行動のオスとメスでの比較　吉行
近藤　友之　神奈川県津久井湖のブラックバスの季節ごとの行動と食性　吉行
酒井　利之　小型陸棲哺乳類の捕獲による環境解析の手法について　吉行
佐藤　舞子　東京都青梅市御岳山におけるムササビの生態ならびに行動に関する研究　吉行
鈴木　迅　北浅川上流地域及びその周辺地域に生息する野生ニホンザルの生態に関する研究　吉行
高山　太郎　ディストレスコールを用いたカラス防除の効果について　吉行
十時雄一郎　アブラコウモリの夏期における多摩川での生態及び冬眠期の観察　吉行
中澤　美和　狭山丘陵におけるリス類の分布　吉行
橋本　洋輔　エンザイムイムノアッセイによる鳥類の糞便からの性ステロイドホルモンの抽出・測定　河野
平松　典子　災害時における動物救護対策の現状と今後の課題—兵庫県南部地震災害・有珠山噴火災害を通して—　河野
前田　悠平　卵母細胞の体外発育に関する研究　河野
松岡　和樹　東京都青梅市御岳山におけるムササビの生態ならびに行動に関する研究　吉行
黛　岳志　EIAによる爬虫類糞中ステロイドホルモン測定方法の開発　河野
三浦　貴光　元競走馬の行動と心理に関する研究—環境に対する順応性—　吉行
山田　献次　飼育下におけるフェネックフォックスの行動について—特に性・年令の関係—　吉行

横山　恵美　伊豆大島に棲息するキクガシラコウモリの生態—主に個体群の動態と行動の季節変化—　吉行
吉崎　良邦　OPS法によるマウスの未受精卵、精子のガラス化保存　河野
渡部　知之　北浅川上流地域及びその周辺地域に生息する野生ニホンザルの生態に関する研究　吉行
木村奈穂子　飼育下のフンボルトペンギン幼鳥の巣立ちからつがい形成までの成長過程　吉行
松下　幸子　鶏胚における単為発生誘起に関する研究　河野

退職にあたり

農大と共に歩んだ半世紀

家畜育種学研究室
教授　田中一栄

はじめに

今般、畜友会役員から表題の原稿依頼があり、もはやその時期になったのかと月日の速さに顎然とした。

昨年春に世田谷から厚木キャンパスに移転した際には、後一年で定年退職を迎えることは充分承知していたが、引越し荷物の整理もされないままあっと云う間に過ぎてしまった。それは年齢と共に一日が、一ケ月が、そして一年が短く感じられるようになったせいかも知れない。しかし、農大で過ごした半世紀は決して短いものではなかった。その間にあった色々な出来事や多くの思い出が走馬灯のように頭を掠めるが、あまりにも古くて考えが纏まらない。そこで思い付くままに昔を振り返って筆を運ぶことにする。

世田谷キャンパスでの二年間

昭和二十三年四月、東京農業大学予科に入学を許可されて、希望に胸をふくらませて上京した先が旧陸軍機甲整備学校の跡地、現在の世田谷キャンパスである。

昭和二十年の東京大空襲で青山の常盤松キャンパスが全焼したので、翌年には前述の世田谷に移転して授業が再開された。従って講義は兵舎の建物やガレージを利用した教室で行われた。当時のキャンパス内には各種車両のガレージがあり、その一部はかなり長く存在していた。それは十数年後に、再び世田谷のキャンパスに戻ったときの住居が、旧図書館（現在一高の体育館）裏の戦車のガレージをベニヤ板で間仕切りしたものであつた。

さて、大学予科での思いでは、英語の時間に羽織り袴に草履で講義される先生がおられたので、コンクリートの床に水を撒いて困らせたこと。部活で最初に入った自動車部では、トラック一台のみの練習で、その順番がなかなか回ってこないのですぐ退部したこと。次に、友人に誘われてホッケー部に入ったが、当時はサッカー部やラグビー部で占められていた農大のグランドが使えず、毎日放課後には八幡山の明大グランドまで歩いて練習したことなどである。

予科一年終了時に、学校教育法による新制大学設置が認可され、農学部に八学科が新設された。そこで何れかの学科を選択することになり、昭和二十四年四月に畜産学科に入学した。

戦後間もないこの時期に農学部で畜産を学ぼうと思い付いた動機は、多分に戦争中の慢性的な空腹感と、進駐軍の放出物資であったバターやチーズがその原因の一つであったような気がする。

新設された学科のうち林学科と畜産学科は、二年次迄の教養科目は世田谷で実施し、三年次以降の専門科目は千葉農学部（茂原分校）で行うことになっていたが、これも一年次末になって、二学科の全面的移転が決定した。

茂原キャンパスでの十一年間

当時は千葉農学部と称され、千葉県長生郡茂原町高師の旧海軍航空隊の跡地に設置された。教室や学生寮には兵舎の建物が利用されていたが、広大な土地に畜舎と農場が併設され、畜産学科にとっては実学的なキャンパスであった。

昭和二十八年に畜産学科の一期生が卒業し、三十年に千葉農学部は茂原分校と改称され、また茂原町も茂原市に昇格した。しかし、相変わらず東京からの交通の便が悪く、特に千葉からの房総東線は本数が少なくて不便であった。さらに、キャンパスは航空隊の跡地で近くには飛行場もあり、街からは遠く駅からのバスの便もなく、学生達は専ら徒歩により行動した。

このような環境のために多くの学生は寮に入って共同生活を余儀無くされた。しかし、この寮生活も今となっては懐かしい思い出の一つである。ストームと称して夜中に叩き起こされることもあったが、マージャンの相手はすぐ見つかり、食費の納入が滞っても食堂の御夫妻は嫌な顔をせずに食べさせてくれた。このことは、農大生に対する茂原の街の人々の好意にも通ずるもので、全くお金が無くてもしばらくの間は生活が出来たのである。

さて、この学生寮は常盤寮と呼ばれていたが未だ寮歌がなく、そこで昭和二十五年の秋に行われた寮祭で寮歌が募集された。これに応募して見事に当選したのが作詞と作曲の何れも畜産学科の一期生であり、常盤寮々歌として事あるごとに歌われていた。しかし、その後は林学科や畜産学科の学生に引継がれることなく、いつの間にか立ち消えてしまった。ところがこの寮歌は奇しくも開発学科の学生に引継がれていたのである。そこで畜産学科の学生にも先輩達の手作りの寮歌を引継いで頂きたく、この紙面を借りてご披露傍々お願いする次第である。

昭和三十一年、林学科が世田谷キャンパスに引揚げた後に、農学部に増設された農業拓殖学科（現、国際農業開発学科）が茂原分校に開設され、また二学科の体制となった。しかし、その後まもなく茂原分校の閉鎖と本校への移転の話が持上がり、昭和三十四年から両学科の新入生は世田谷で授業を受けることが決定した。従って、二年後の完全移転までは、一、二年次の講義に茂原から世田谷まで出張した。この方式は今般の世田谷から厚木キャンパスへの移転と同じであるが、距離と時間は全く異質であり、大変苦労したことを覚えている。

再び世田谷キャンパスにて

昭和三十六年四月から畜産学科は全員そろって世田谷

キャンパスで活動を開始したが、その根拠地である研究室は、現在の体育館の場所にあった本造の旧講堂をベニヤ板で間仕切りした仮住まいであり、床はコンクリートで天井も無く、それは正に予科時代のガレージの教室を思い出させるものであった。

キャンパスの中で鉄筋の建物は一号館の教室のみで、二号館の研究棟が建設中であった。それが昭和三十八年に落成して畜産学科の研究室も一部を除いて移転した。すなわち、育種、繁殖、飼養、経営の各研究室であり、衛生研と利用研は北門脇の木造の建物に居を構えた。その後生理研が独立し、利用研も二号館に移転して、衛生研のみ家畜診療所と共に北門脇で頑張った。

家畜診療所といえば茂原時代から存続していたが、世田谷に移転してからは、昭和三十七年に設立された家畜血清学研究所と共に学校法人東京農業大学の研究所設置規則により運営されてきた。血清学研究所は設立以来、世田谷キャンパスの建物の一部を借用しながら数度にわたって移転し、最終的にグランド東側の四号館に落着いた。しかし、畜産学科の厚木キャンパスへの移転を契機に、平成十一年に終息を迎えた。

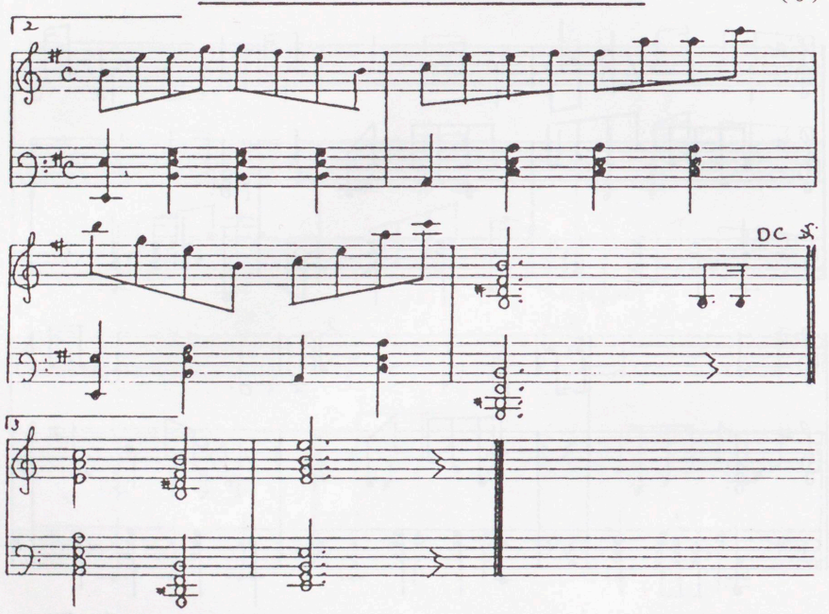
農場と厚木キャンパス

東京農大の農場は戦前から幾多の変遷を経て、大正五年に世田谷の用賀の地を購入して用賀農場とした。現在の関東中央病院の辺だったと記憶しているが、当時の学生は渋谷から玉川電車で用賀まで実習に来た。昭和九年に建築された農場本館は洋風の瀟洒な木造建築物であり、昭和三十五年に農場が売却された後も、現在の成人学校の場所に移設され、用賀記念館として保存されていた。

用賀農場の代替地として購入されたのが厚木中央農場で、現在の厚木キャンパスである。当時は厚木市の防災公園を含む約二十八ヘクタールの広さであった。そして昭和三十六年以降の撤収で茂原分場から厚木中央農場に移転した畜産部は現防災公園の殆どを占めていた。

しかし、大学の事情により厚木中央農場の一部が処分されることになり、再び畜産部は移転を余儀無くされた。すなわち、昭和五十九年に森永乳業㈱より無償貸与されることになった那須牧場に乳牛を移し、肉牛、豚、家禽等は富士畜産農場に移動して畜産部は二分された。当時の那須牧場はフリーバン牛舎における自動給餌及びタンデム型ミルキングパーラー等の近代的酪農施設を有していたが、諸般の事情で平成元年に閉鎖された。以後畜産部は全て富士畜産農場に統合されて現在に至っている。

最後に、畜産学科が分断された昭和三十五年、学生間の親睦を計るために畜友会が茂原の富士見野の地に誕生した。その機関誌であるふじみの第一号には茂原分場のサイロと繋牧馬の写真があり、第三号には厚木中央農場に建設された牛舎と乳牛の放牧写真が載っている。しかし、これらの貴重な機関誌が畜友会に保管されていないのは誠に残念である。



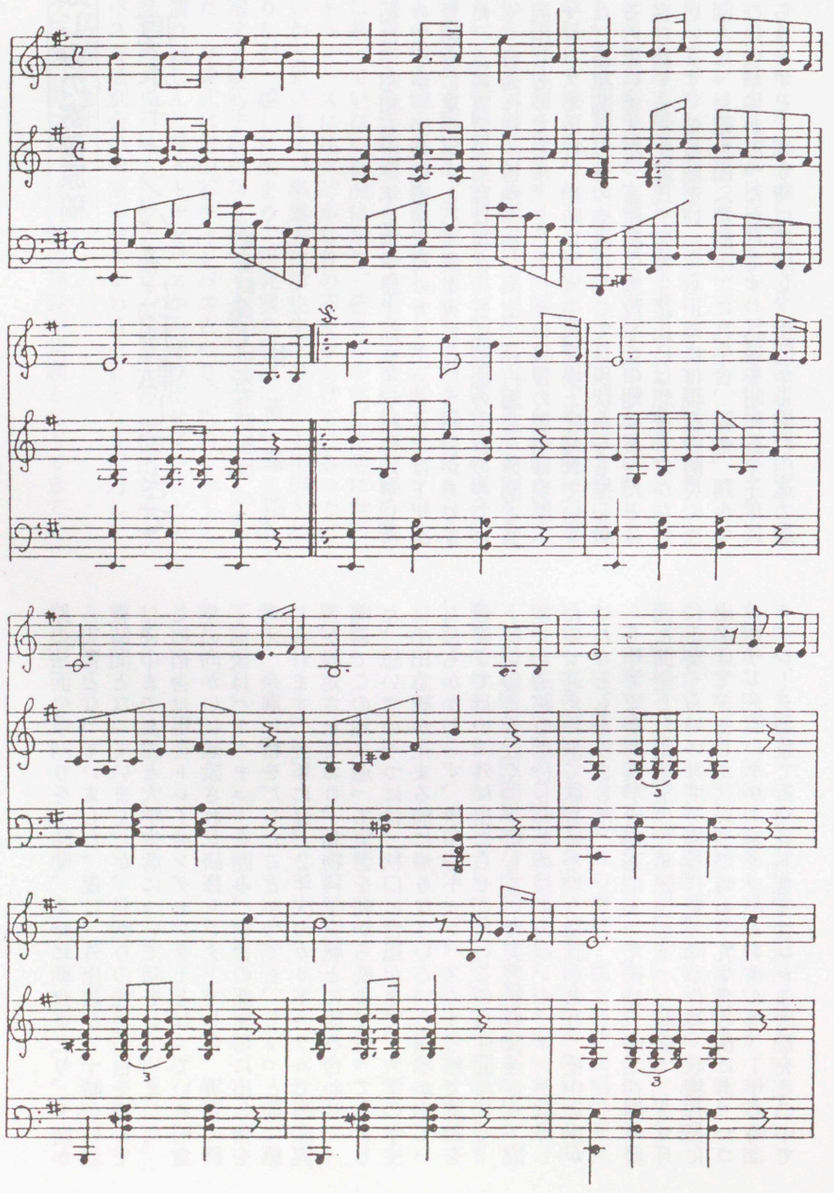
常盤寮々歌

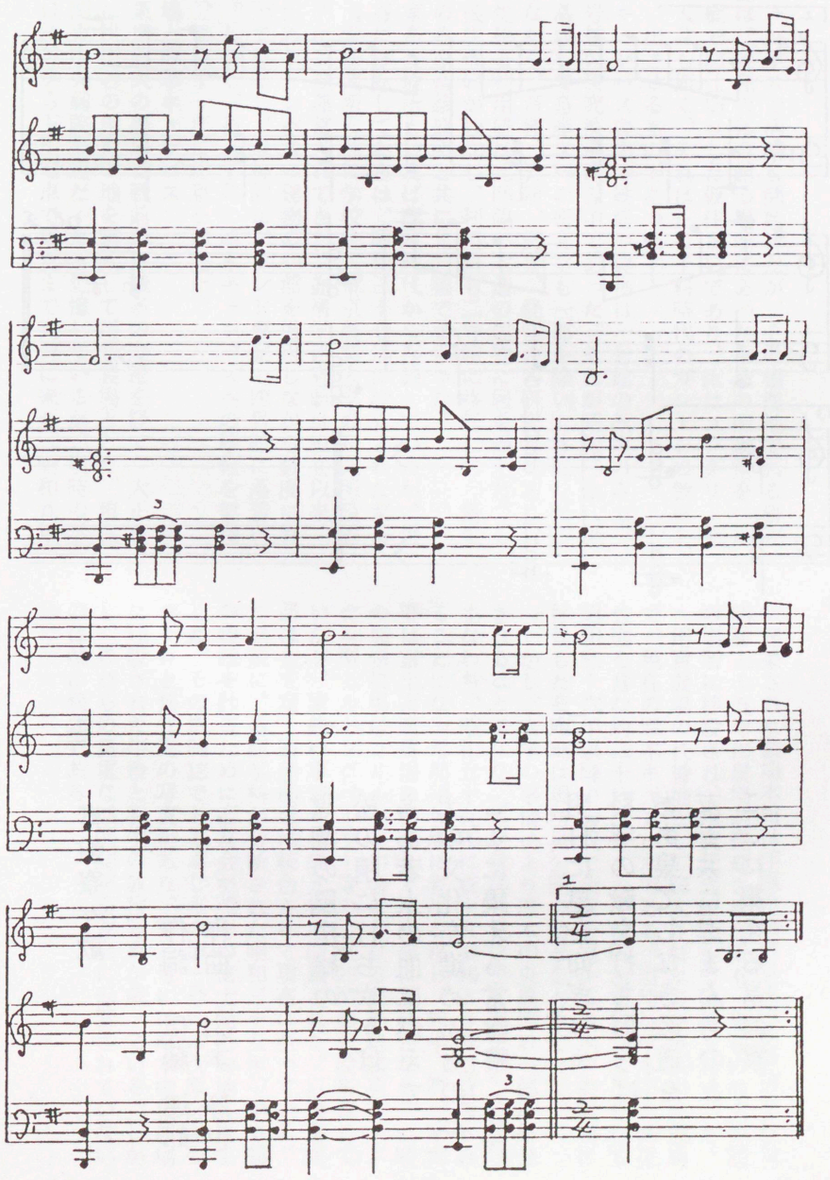
作詞　伊藤達郎
作曲　山本静也

一、
黒潮の風房総の
松の梢に打ち吹かば
ああ若人の血は燃えて
土の文化を進めんものと
ここに集える常盤寮

二、
明日に星を仰ぎつつ
科学の鍬を打ち振らば
ああ果てしなき教道を
友と共に進まんものと
ここに集える常盤寮

常盤寮々歌





ふじみの寄稿原稿

厚木キャンパスに移転してきて

家畜飼養学研究室助教授
祐森誠司

私は、昭和五十三年に本学農学部畜産学科に入学したわけですが、当時の畜産学科のカリキュラムでは1年次の夏休みに夏季集中として農業実習という科目がありました。この実習の内容は現在の畜産関係の実習のみではなく、普通作物、特殊作物、果樹、花卉園芸、造園と盛り沢山なものでした。そして、その実習の現場は現厚木キャンパスであり、当時は厚木中央農場と呼ばれていました。畜産関係以外の施設に関しては現状からも推し量れると思いますが、畜産関係施設もこの地にあったとは現在在籍する学生諸氏や卒業生諸氏には想像も付かないと思います。この地といっても正確には現在の防災の丘公園となった砲台山（豊醍山）に乳牛舎、豚舎、鶏舎ならびに牧草地があったわけです。話題を昭和五十三年に遡らせますと、朝6時に起床し、正門から砲台山迄の道路の法面の草刈りを1時間、7時に朝食をとり、9時から実習となっていました。夜は、外出禁止で十時には就寝時間となっていましたが、見回りの先生の目を盗んでは夜中まで友達と大学生活について話をしていました。この宿舎は現在トレーニングセンターとなっている旧食堂の向かいに建設された研修センターでした。実習の終了前後はバーベキューを囲み、宿舎の部屋毎に出し物を考え、余興に精をだしたことが今でも、ちょっと前に感じられます。翌年には、2年次のカリキュラムで畜産実習が設定されており、動物科学実験との組み合わせで、隔週でこの地に通って実習を朝から晩まで行ってきました。思いでの一つには、秋口に台風がきて、大学の学生は小田急線が止まる前に帰りなさいという指示が出ていたにもかかわらず、世田谷キャンパスの4号館で実験を最後まで行い、外に出たらそこにいるのは仲間だけで、下宿に帰ると近くに下宿していた実習組の友達から、冠水した道路を走行したためにナナハンのバイクが故障したので迎えに来て欲しいという電話があり、夜中に出かけたこともありました。

3年で家畜飼養学研究室に入った後は、南毛利側の斜面に開墾した研究室の牧草圃場があった関係で、2カ月に1度くらいの頻度で播種作業、除草作業、収穫作業に出かけてきました。いつの時も、乳牛舎の横にあったコンクリート製のタワーサイロがシンボルで、1年の時はサイレージ調整で青刈りトウモロコシの雨霰をこの中で

被ったんだなと思っていたのですが、畜産部門の富士農場への移転をきっかけに開発され、私達世代の厚木農場のイメージはなくなっています。

そして、今から3年前（正確には4年前）に理事長・学長から厚木農場を新たに厚木キャンパスとすることで、農学科・畜産学科の2学科で農学部を組織して移転して欲しいという意向が伝えられたわけです。これまでに畜産学科は2度の引っ越しを経験しており、その度に安定した研究体制を構築するのに時間がかかった経緯を知っているので、学生生活面（授業、研究、課外活動等を含めた）、教職員の生活面などあらゆる角度からの複合的な移転条件を検討し、大学にこれら条件を認めてもらうことの引き替えに移転を了承しました。厚木キャンパスの開講から3年経過したわけですが、まだ条件内容の整備は整っていない状況にあり、皆さんの学生生活に世田谷キャンパスに比べ、かなりの不便をかけているのではないかと思います。卒業生は学生生活最後の1年が大がかりな引っ越しに始まり、研究室の整備に手間取り、卒業論文実験着手がかなり遅れ、大変申し訳なく思います。また、卒業式は世田谷キャンパスとなり、折角この1年で慣れ親しんだ厚木キャンパスから送り出せないことが残念であると共に、在校生も勝手の分からない世田谷キャンパスで送別会の準備等をすすめることとなり苦労したことと思います。

次年度以降には、体育館の建設が話題となってきていますが、まだまだポストの設置や銀行のＡＴＭ設置といった細かな内容の課題は数多く残されています。非力ではありますが、畜産学科教員として、また学科主事としての立場からもよりよい畜産学科学生のための生活空間、キャンパス、の創造に尽力して行きたいと思っています。

本年度で卒業される諸氏には、今後の活躍を祈念するとともに、厚木キャンパスの整備、富士畜産農場の充実に対しての篤いご支援をお願いし、在校生の諸氏には問題解決についてのご協力をお願いしたいと思います。

話題展開が、回顧録的な内容から現実問題と変化して複雑ではありますが、「ふじみの」の誌面をお借りしました。

畜友会諸君！

家畜生理学研究室
助教授　半　澤　　恵

今はいつだと思う？こういえば、もぐりでない限りわかるはずだ。諸君達がへとへとの体で、明朝6時半を気にしながら、充実感、安堵感、悔しさ、いろんな気持ちが交錯する中での打ち上げが佳境を迎えつつある、正にその時間だ。昨年より長く、苦しい、しかしもっとも充実した収穫祭。この文章を一番読んでもらいたいのは、君たちだ。1年の時の不安と渇望のこもった眼差しが、今は自信と優しさに溢れて見える。自分を信じ、仲間と心を一つにして大きな目標に向かって突き進んできた諸君。その得難い経験を生かし、諸君がこれから先に巡り会う様々な機会をしっかりと捕らえ、人生を切り開いていって欲しい。願い、思いは必ずしも通じないが、諦めてしまったら、何も得ることはできない。どんなに困難に思えることでも、たとえたった一人の戦いであっても、諦めさえしなければ、なんとかなる。苦しさは、敗北は、自分を成長させる最大のチャンス。どうか、諸君がつくった畜友会の新しい歴史をしっかりと21世紀に引き継ぐよう、あと1年、後輩達を暖かく導いて欲しい。さて、別に忘れていたわけじゃない。4年生諸君、3年間世田谷にいながらよくここまで、厚木キャンパス育ちの後輩を育ててくれた。そして、よく畜産学科を体育祭総合V2に導いてくれた。この畜友会での経験を、これからの人生に生かして欲しい。それにしてもほとんどの競技で優勝とは。櫓装飾も、応援も最高だった。綱引きでしか優勝したことのなかった頃が懐かしく思い出される。北門装飾も、特別企画も、宣伝隊も、みんな本当に精一杯頑張った。そして、すべてが最高の出来映えだったと確信する。

二〇〇〇年十一月四日

今、「けやき」のディスプレイに、収穫祭のビデオが映し出されている。皆のいきいきした顔が映し出されている。3年生はすっかり晴れ晴れした顔をしている。これで終わり？いや新しいスタートだ。人生が続く限り、常に新しいはじまりがある。2年生よ、今度は君達の番だ。1年生をそして新入生をぐいぐい引っ張ってゆけ。さて、1年生よ、もうすぐ新入生が入学してくる。いかにして多くの仲間を引きつけることができるか。それにはまず自分が魅力ある人間になること。今を大切に鋭気を養え。

二〇〇〇年十一月二十二日

さっき、ふじみのの原稿、つまりこれを書くように頼まれた。去年の原稿にも書いたが、昨年はほとんど統一本部に顔を出さなかったから、正直2年生の顔はこの収穫祭で覚えた。もうだいたい書けてるなんていったけど。

この後どうやって締めようか。少し考えることにする。

二〇〇〇年十二月五日

やはりこれしかない。畜友会に対する2つのお願いだ。まず、ひとつめは常に開かれた、かつ求心力のある畜友会であって欲しいということだ。諸君達は畜友会の諸活動を通じて、情熱と団結という素晴らしい財産を手中にした。しかし、サークル活動のような小さな団結を抜け切れていない部分がある。畜産学科の学生を代表するような団体に成長して欲しい。諦めずに、ひとりでも多くの学生に呼びかけ続けて欲しい。また、何気なくこれを読み進んできた諸君には、是非、どんな形でもよいから畜友会活動に参加して欲しい。すべての道は収穫祭に通じる。現在の畜友会は、新歓、ふじみの、卒業生祝賀会のどれをとっても、そんな感じだ。だが、収穫祭統一本部だけが畜友会ではない。新天地に根を降ろして1年が経つ。何か新しいことを考える時期かもしれない。そのためにも、もっと大勢の学生の参加が必要だ。また、これまで熱心に活動してきた諸君には、それを受け入れる懐の深さが必要だ。諸君がこれを目にするころは、2年生は来春からの研究室が決まっていることだと思うが、みなうまいこと散らばったかな。ふたつめは、卒業しても仲間との繋がりを緊密にして欲しいということだ。諸君達は卒業した先輩達と連絡を取り合ったり、たまには集まったりする機会はあるのだろうか？もし、ないなら是非OB、OG会をつくって欲しい。少なくとも、一緒に過ごした連中とは定期的に会うことをお勧めする。

二〇〇一年一月一日

さて改めて、「卒業生諸君おめでとう！」心からお祝いする。諸君達の卒業には、特別に深くて重い意味がある。そのことを痛感する時が必ずくるだろう。諸君の新世紀における目覚しい活躍を祈る。

新入生諸君、入学おめでとう！伝統ある農大の若いキャンパスで、諸君のエネルギーを勉学はもちろんのこと畜友会の一員として様々な課外活動においても存分に発揮し、充実した学生生活を送られることを期待する。

二〇〇一年一月吉日

集う学友

農業実習に参加して

4年　内田弥生

マイナス20度の寒空の下、牛の尻を追いかけていたのも、もう一年前のことです。私は去年、一年間休学して国際交流センターのアメリカ農業実習プログラムに参加しました。実習先は養豚と、大豆の生産が全米一の州、中西部のアイオワ州です。搾乳牛300頭、育成牛100頭、肥育牛100頭の規模の酪農農家です。主な仕事は1日3回搾乳のうちの2回の搾乳でした。

実習へ行くことが決まって、周りの友達から、何故休学してまで一年も実習に行きたいのかと聞かれました。一番大きな理由は、やはりこのままの経験力で卒業して酪農家を目指すのは、物足りないと感じたからです。そして単純に広大なアメリカの大地で酪農という世界の現状と、その行く先をじっくりと眺めてみたいと思ったのです。このまま卒業するのが物足りない、何かをしてみたいと思っているなら、是非おすすめします。

向こうでの生活は、すべてが知らないこと、新しいことばかりで、更に仕事も搾乳だけでなく、300頭の搾乳牛の発情発見、体調チェック、投薬、乾乳牛や初乳牛の処置など次々と増え、本当に一日があっという間に過ぎてしまいます。一日の仕事をすべて終えると、もうヘトヘトで、夕飯を家族と食べるとシャワーも浴びずに眠ったりという生活です。それでも朝起きて、元気な牛たちが搾乳パーラーに入ってくるとたちまち私も元気になります。その度に、やはり牛が好きだという気持ちがあふれ、ここに来て良かったと心から感じていました。

実習以外には一週間集中で行われる夏・冬二回のセミナー、渡米後一ヶ月間の英語学校、実習終了後の個人旅行、カナダ旅行などがありました。セミナーでは大学の学生寮やモーテルに泊まって、講義を受けたり、農場や研究所、飼料会社を見学したりと、実習とは別に、とても良い経験になりました。夜になれば同じ実習生同士で集まり、ブラジルや韓国といった国籍を超えて、酒盛りしながら語り合い、音楽をかけて踊ったり、お互いカタコト英語だったけれど、別れる頃にはすっかり良い仲間になり、別々の実習先に帰るのがつらかったです。

帰国してすぐに書いた報告文に、私は心の底から「楽しかった」とは答えられないと書いたのを覚えています。それは、がむしゃらに働いてつらかった記憶が大部分を占めていて、一年の実習で得たことを受け止め切れていなかったからで、今は少し変わりました。今の私にとって、この一年間は何ものにも変えがたい大切な時間です。

そして実習で出会った沢山の友達が、とても大きな存在になっています。離れたからこそ分かった家族の温かさも、大切にしたいです。

私達の畜産学科に秘められた可能性は無限大です。私達に求められているものは沢山あると思います。自由のある農大で、自分の可能性を、どんな形であれ、積極的に伸ばして欲しいと思います。

大学卒業、この先の不安

4年　佐々木　大

「大学に行って何を勉強した？」

と、質問があり、

「私は、〜学の特に〜について勉強した。」

と言えれば、100点満点。

「私は、〜学科にいたから〜ついてなら少しは…」

と言えれば、今の学生は、まだいいほうなのかもしれない。聞いた話によると、アメリカの学生の長期休業は、大学の授業料を払うためのバイト期間だという。日本の大学生は、ほとんどが学費を親が負担し、さらに生活費まで賄うのが当たり前のようになっている。その中で、本当に大学に学びに来ている人はどのぐらいいるのだろう。講義が休校なら微笑を浮かべ、講義が時間よりも早く終われば、「ヤッター」と大声で叫ぶ。何かが違う、理論的に考えてみれば、畜産学科で講義一限（90分）当たりだいたい7000円位の計算になる。それを、学校、または先生の都合で休校、または早く切り上げたりしているのだから、もし自分が授業料を払い、勉強したいと思っているのなら、納得できるわけがない。

と、思いつつも、自分で授業料を払っているわけではないから実感がわかず（言い訳）、自分も休校になると喜んでいるほうだ。自分も含めて、日本の学生は甘えすぎているといっても、過言ではないような気がする。自分で学費全部とは言わないが、半分ぐらいは、払ったほうが身になるのではないだろうか。

ある先生が、

「今年の学生は、授業態度が悪すぎる」

と、こう言っていた。今年の学生ではなく、その学生を受験で選抜したのは先生、あなた方です。授業態度が悪いなら悪いなりの対処法があるはずで、「悪い」の一言で片付けてしまうのはどうかと思う。（先生全員というわけではない）

学生には、まだまだ不満が存在する。もちろん先生にもあるはずだ。すべて先生、学生間でもっともっとコミュニケーションがとれれば、想像もできないような大学になるかもしれない。だけど大学を卒業するということは、どんなことだろう？

自分は、酪農家の息子として生まれ、高校卒業後練習生を経て、東京農業大学農学部畜産学科に入学した。入学した頃の自分は、不安より「畜産学の勉強ができる」と期待のほうが大きかった。しかし、実際は、勉強する意識とは裏腹に、だんだんとだらけていく自分がいた。

そして、

「自分はなんのために大学に来たのか。」

「この講義が何の役にたつのだろう。」

と、考えるようになり、講義には出席せず、バイトばかりするようになった。こんな学生生活で何を学習したというのだろう。

実家に帰り、周りの人たちには大卒として扱われる。はっきり言ってプレッシャーだ。何の勉強もしていない自分、そしてそんなことを知らないで少しながらも期待する周りの人たち。自分の父が、

「農業は大学行っても行かなくても変わらない。農業は毎日が勉強だから、お前が農業をやる頃、たぶん高卒の人に経験、知識共に及ばないかもしれないな。」

と、言った。まさに父が予想していた、そのままの人間がここにひとりできあがったのだ。まあ、大学に行っても行かなくてもというのは、あっているかどうかはわからないが、これから農業という分野で苦労するのは目に見えている。目に見えているからこそ今勉強をしなければいけない。

「今勉強をしなければ」ということは、大学4年間何も得ていなかったのかというと、そうでもない。自分もそうだが、自分以外の卒業生・後輩も大学を卒業して、初めて気が付くことになると思う。近くにいつも、友達・仲間がいたこと、そしてわからないことがあれば、教えてくれる先生がいたこと、このことほど、恵まれた環境はないだろう。この環境を大事にしていれば、自分が事業を起こそうという時、経営をもっと潤滑にしたい時など、多くの希望、また困難に立ち向かう自分の最大の武器（味方）となるだろう。

大学生活、充実したとはいえないが、一生涯充実できるだけのものはできたと、自分は思う。

農大はこれから、もっともっと変わっていく。

自分は死ぬまで、このままの自分でいたい。

彼女に届け！この想い

3年　齋藤常浩

ようやく彼女に逢える時が来たのだ。告白を許されるこの瞬間が。今振り返るととても長い様であったが、あっと言う間の出来事に感じる。思えば2年前、出逢った瞬間から俺の心は彼女に惹かれていた。

一九九八年十一月四日。一体どんな人なのだろう？噂で聞いたのだが、滅多に逢う事が出来ないらしく、彼女に逢った者は皆、その妖艶な美しさ、燃え盛るような熱い情熱、そして総てを包み込んでくれる包容力に心を奪われてしまうと言う。楽しみで心が高鳴る。そして一人の女性が暗闇の中から目の前に現れた。と、同時に全身に鳥肌が立ち身震いが起きた。なるほど、噂通りの女性だ。思わず目が奪われた。美しすぎるその外見、誰をも寄せ付けないその熱さ、それに対して見ているだけで疲れ切った心を癒してくれるその優しさ。彼女を見つめていると涙が溢れ出て止まらない。今まで出逢った事の無い素晴らしい女性だ、と心から思った。そう思っているうちに涙で一杯の目の前からふっと姿を消してしまった。

一九九九年十一月四日。今年もこの日がやってきた。

今年はどんな顔を見せてくれるのだろう?去年の姿が脳裏に浮かぶ。そして彼女は目の前に現れた。久し振りに逢えたせいなのか涙が込み上げた。その瞬間目が合って彼女が微笑んだ。嬉しかったが、嘲笑していたかのようにも見えた。そりゃそうだ。俺の様な未熟者に振り向いてくれる筈がない。だがどうしても彼女と話してみたい、絶対に俺のこの想いを伝えたい。そう思っていた俺の所に、彼女と話が出来るという話が舞い込んだ。滓かではあるが一筋の光が差した感じがした。と、同時に彼女と話をするためには相当な努力と根性、そして熱い情熱が必要であるという事も聞いた。勿論どんな努力も惜しまない。彼女と話せるなら、俺の気持ちを伝える事が出来るのなら、と思いその話に乗った。

そして今年2000年。俺はこの一年彼女の事しか頭になかった。何処かで見てくれているかも知れない彼女にアピールしたかった訳ではないが、彼女の事だけを考えている事が俺にとって心の支え、そして勇気の源となっていた。勿論この想いが報われる保証は何処にも無かったのだが。ほぼ徹夜の毎日で移動の電車のシートが俺の布団代わりだった。始発で経堂を出て眠りに就きそのまま小田原まで行ったことも度々。一日に世田谷厚木間を4往復した日もある。殆ど授業もサボり毎日駆け回っていた。左足を骨折した事もあった。他にも此処では書けない事が沢山ある。ありすぎた。この一年してきた事を思い出してしまった為、恥ずかしい事に彼女に逢う前に、いけないと思っていたが涙が溢れてしまった。涙脆い自分に腹が立つ。彼女に見られてしまったかも知れない。嫌な予感がしたが、彼女への思いを秘めつつ現れるのを待った。いつの間に現れたのだろう。目の前に忽然と姿を現した。久し振りに逢うことが出来た彼女はいつもと変わらない姿を見せてくれた。俺も熱い人間だと思っていたが、いざ彼女の前に立つと遥かに彼女の方が熱かった。だが圧倒されている訳にはいかない。想いを伝えられるのは今日の、この瞬間しかないのだ。そう思いながら告白した。「農大名物青山ほとり。元気よく109番～!!」俺は彼女に対する総ての想いを伝えた。認めてもらえるかどうか判らない。今の俺に出来る事はこうする事しかなかった。だが、気持ちを伝えきる前に俺の方が力尽きてしまい、無様な格好をさらけ出してしまった。これじゃ駄目だな。彼女は何も答えてはくれない。しかし、彼女の仕草で答えが読みとれた。片思いの恋の幕が降りた。これで彼女に二度と想いを伝える事は無いだろう。だが振られてしまった以上、今度は別の次元から、別の意味で彼女の支えになっていきたいと思った。もしかしたら俺の方を振り向いてくれるかもしれないと言う期待を持ちつつ。振られてしまったのに何故か清々しい気分だった。同時に肩にのし掛かっていた重荷が降りて軽くなった感じがした。彼女は目の前から去っていってしまった。沢山の仲間と抱えきれない程の思い出を残して。俺は彼女を一生忘れる事はないだろう。

『収穫祭には魔物が棲んでるんだって!知ってる?』
『噂で聞いた事があるけど詳しい事は知らないよ』
『何でもその魔力に取り憑かれてしまう人もいるらしいんだ。でも人の秘められた可能性を導き出してくれる力を持ってるらしいし、そして最後には掛け替えのないモノを残してくれるんだってさ。』
『へぇ、面白そうだね。じゃ、俺も取り憑かれてみようかな?その魔物に。』
『一緒に行ってみようぜ?』

今宵始まる狂想曲　誰もが集う収穫祭
魔物が巣食う3年　うその場所へ　いざ行かんかな若人よ

私の学生生活

2年　山本美和

私は二時間かけて、千葉にほど近い東京下町から通学しています。家と学校とアルバイトの往復でとても忙しいけれど、学業も友人関係も順調で、充実した楽しい日々を送っています。

元々私は世田谷キャンパスにある学部を第一志望としていましたが、畜産に受かり、浪人でもう後がなかったためにこの学科に入学しました。なので畜産学科の事をほとんど知らずに、まずキャンパスが厚木に移転していてとても驚きました。そして厚木キャンパスが世田谷とはずい分印象が違うのに本当に驚きました。厚木は大学というよりも大手の予備校、キャンパスの外観は大病院のようなイメージがしました。郊外の高台に大きくそびえ立つ新築の建物や、校舎の構造が病院や予備校を連想させると思うのですが、世田谷のような伝統や活気に満ちあふれた雰囲気はなく、入学当初とてもあの私が憧れていたような農大生活はできないと考えていました。

アルバイトも浪人時代から続けている為時給・待遇が良いので地元で未だに働いています。なので毎日授業が

終わると猛ダッシュでアルバイトへ。そのせいで学校にいられる時間が本当に限られていたので、私は大学で友達を作れるか心配でした。いや友達はできていたのですが、一人暮らしをしている人が多い中、自分はいつもすぐ帰宅だったので、気の合う友人がいっぱいできても仲を深める時間がない。家が近いと会える時間もそれだけ増え、ときが経つにつれだんだん仲の良い者達の輪ができて、そのうち入りこめるすき間がなくなる気がして不安でした。

私が今、仲の良い気の合う友達に囲まれているそのきっかけとなったものが教職でした。二年のはじめになって教職課程に編入したことでした。教職ではこの課程を選んだ人達だけが受講しますが、その人数は数十人。それまで大きい教室に二百余人もが一気に授業を受けているのとは明らかに雰囲気が違いました。また実習も多く、その中での班編成などで新しく友達になれた人がたくさんいました。いつも学校と地元との往復の毎日で、新しい友人を作る機会はなかったのでとても嬉しいことでした。サークルに参加できる時間もなかった私には、この「教職仲間」ができたことで何もなかった学校とのつながりができた気がして、やっと憧れの農大生になれた気がしたのです。

もうすぐ研究室に入り、学業の充実はもとより、また教職のときのように、新しい友人ができるのではないかと期待しています。

畜友会

1年　桐生茂昌

私が畜友会に入ったのは、収穫祭からでした。当時、バイトもせず、かなりヒマをもてあましていたところ、同じサークルの人が農学の統一本部に入っており、収穫祭が近づくにつれ、楽しそうに忙しい状態でウッキウキになっているのを見て、自分も「ヒマだしやってみようかなぁ」程度のノリで、この畜友会に入りました。

やはり入って良かったと思う面は世田谷にたくさんの友人ができたことです。収穫祭という同じテーマを持った熱い人々が厚木にも世田谷にもたくさんいます。多少はツライ面もありますが、農大の醍醐味でもある収穫祭を7～8倍（当社比）楽しんだ事に関しては、つくづく入って良かったなと思う次第であります。

さて、収穫祭で私が何をやったかというと、主に体育祭と宣伝隊による宣伝活動です。体育祭では畜産学科ならではの男気あふれる舞を行い、15学科中2位という、素晴しい成績をおさめ、とても悦楽的でありました。また、宣伝隊においては、厚木周辺の駅において、野菜の無料配布などを行い、通りすがりの見知らぬ人と触れ合い、農大生であることを実感し、何か言葉では言い表せないちょっとした感動をありがとうってな感じの日々をすごしました。

私にとって畜友会とは、かけがえのない友人や先輩との出会いや、何より大学生活をより有意義にすごすための組織団体であり、これからもそうあって欲しいし、常日頃から何かに貢献していきたいと思います。

平成12年度畜友会事業報告

畜友会だより

平成12年

6月19日～21日	厚木キャンパススポーツ大会参加
6月29日	平成12年度畜友会定期総会
7月28日	収穫祭説明会（1年生対象）
10月11日	第1回厚木キャンパス収穫祭・第109回世田谷キャンパス収穫祭畜産学科統一本部本部開き（於レストラン・けやき）
10月28日～29日	第1回厚木キャンパス収穫祭参加
10月31日～11月4日	第109回世田谷キャンパス収穫祭参加
11月22日	第1回厚木キャンパス収穫祭・第109回世田谷キャンパス収穫祭畜産学科統一本部慰労会（於レストラン・けやき）

平成13年

3月19日	畜友会誌「ふじみの第37号」発行
3月20日	卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
4月下旬	新入生学外オリエンテーション参加
5月上旬	新入生歓迎会

平成11年度畜友会決算報告

（平成11年６月１日～平成12年５月31日）

一般会計の部

収入の部

科目		予算額(円)	決算額(円)	差額(円)	備考
会費	新入生	2,170,000	1,540,000	630,000	平成11年度新入生 154名×１万円
		0	0	0	平成12年度新入生
	編入生	80,000	35,000	45,000	７名×５千円
	未納会員	986,000	64,000	922,000	７名×８千円 ２名×４千円
雑収入		0	274	△274	利息
当期収入合計(A)		3,236,000	1,639,274	1,596,726	
前期繰越収支差額		43,746	43,746	0	
収入合計(B)		3,279,746	1,683,020	1,596,726	

支出の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)	備考
収穫祭援助費	670,000	670,000	0	特別会計へ繰り出し
スポーツ大会援助費	200,000	200,000	0	第29回スポーツ大会特別会計へ繰り出し
ふじみの印刷費	400,000	364,000	36,000	1200部
卒業生祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業生記念品費	400,000	0	400,000	未払い　※1
新入生歓迎会費	250,000	183,022	66,978	賞品代を含む(1部未払い※2)
消耗品費	100,000	1,281	98,719	
交通費	200,000	51,850	148,150	
通信運搬費	100,000	19,320	80,680	
イベント協賛費	160,000	0	160,000	
雑費	200,000	31,165	168,835	
予備費	100,000	0	100,000	
当期支出合計(C)	2,,980,000	1,720,638	1,259,362	
当期収支差額(A)-(C)	256,000	△81,364	337,364	
次期繰越収支差額(B)-(C)	299,746	△37,618	337,364	

※1　新入生（平成12年度１年生）の会費納入の遅れによる、未払分。(384,000円)

※2　ゲーム商品代の未払分。(53,022円)

上記の通り報告する。

平成12年６月22日

畜友会会長　大谷　忠 ㊞

上記に相違ないことを認める。

平成12年６月21日

平成11年度畜友会会計監査委員

古河　徳 ㊞　岩本伯留佳 ㊞

松岡昭善 ㊞　合田恵子 ㊞

特別会計決算

（平成11年６月１日～平成12年５月31日）

１．第108回収穫祭

収入の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
一般会計より	670,000	670,000	0
当期収入合計(A)	670,000	670,000	0
当期繰越収支差額	99,404	99,404	0
収入合計(B)	769,404	769,404	0

支出の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
統一本部	350,000	268,577	81,423
前夜祭・特別企画	50,000	0	50,000
体育祭	50,000	21,630	28,370
宣伝隊	150,000	83,418	66,582
北門装飾	10,000	0	10,000
家畜苑	150,000	146,601	3,399
予備費	9,404	9,404	0
当期支出合計(C)	769,404	529,630	239,774
当期収支差額(A)-(C)	△99,404	140,370	△239,774
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	239,774	△239,774

上記に相違ないことを認める。

平成12年６月21日

平成12年畜友会監査委員会

古河　徳 ㊞　岩本伯留佳 ㊞

松岡昭善 ㊞　合田恵子 ㊞

２．スポーツ大会

収入の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
一般会計より	200,000	200,000	0
当期収入合計(A)	200,000	200,000	0
当期繰越収支差額	0	0	0
収入合計(B)	200,000	200,000	0

支出の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
第29回スポーツ大会参加費	200,000	85,412	114,588
当期支出合計(C)	200,000	85,412	114,588
当期収支差額(A)-(C)	0	114,588	△114,588
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	114,588	△114,588

上記に相違ないことを認める。

平成12年６月21日

平成12年畜友会監査委員会

古河　徳 ㊞　岩本伯留佳 ㊞

松岡昭善 ㊞　合田恵子 ㊞

平成12年度畜友会予算

（平成12年６月１日～平成13年５月31日）

一般会計予算

収入の部

科目		予算額(円)	前年度予算額(円)	比較増減(円)	備考
会費	新入生	(平成12年度) 2,150,000	2,170,000	1,980,000	10,000×215人
		(平成13年度) 2,000,000			10,000×200人
	編入生	60,000	80,000	△20,000	5,000×12人
	未納会費	1,269,000	986,000	283,000	※1
雑収入		0	0	0	
当期収入合計(A)		5,479,000	3,236,000	2,243,000	
前期繰越収支差額		△37,618	43,746	△81,364	
収入合計(B)		5,441,382	3,279,746	2,161,636	

※1　2年 10,000×64人
　　3年 10,000×34人
　　4年　8,000×28人、5,000×13人

支出の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)	備考
収穫祭援助費	670,000	670,000	0	※1
ふじみの印刷費	400,000	400,000	0	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	400,000	400,000	0	
	384,000			※2
新入生歓迎会費	250,000	250,000	0	
消耗品費	100,000	100,000	0	
通信運搬費	50,000	100,000	△50,000	
雑費	100,000	200,000	△100,000	
予備費	100,000	100,000	0	
当期支出合計(C)	2,654,000	2,420,000	234,000	
当期収入差額(A)－(C)	2,825,000	816,000	2,009,000	
次期繰越収支差額(B)－(C)	2,787,382	859,746	1,927,636	

※1　特別会計とする。
※2　未払いの卒業記念品費、ゲーム商品代を予算に繰り入れた。

特別会計予算

（平成12年６月１日～平成13年５月31日）

第１回厚木キャンパス収穫祭（第109回収穫祭）

収入の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
一般会計より	670,000	670,000	0
スポーツ大会残金繰り入れ	114,588	－	114,588
当期収入合計(A)	784,588	670,000	114,588
前期繰越収支差額	239,774	99,404	140,370
収入合計(B)	1,024,362	769,404	254,958

支出の部

科目	予算額(円)	決算額(円)	差額(円)
統一本部	350,000	350,000	0
前夜祭・特別企画	50,000	50,000	0
体育祭	70,000	50,000	20,000
宣伝隊	150,000	150,000	0
研究棟アート	50,000	10,000	40,000
家畜苑	150,000	150,000	0
予備費	45,000	9,404	35,596
当期収入合計(C)	865,000	769,404	95,596
当期収支差額(A)－(C)	△80,412	△99,404	18,992
次期繰越収支差額(B)－(C)	159,362	0	159,362

平成12年度畜友会役員

（平成12年６月１日～平成13年５月31日）

役職	氏名	研究室
会長	大谷　忠	家畜学研究室
副会長	門司恭典	家畜繁殖学研究室
副会長	栗原良雄	家畜飼養学研究室

委員長	3年	登　健太	家畜繁殖学研究室
副委員長	3年	渡邊靖仁	家畜衛生学研究室
副委員長	2年	関　克史	
書記	3年	鈴木明子	家畜学専攻
書記補佐	2年	柴田彩子	
会計	3年	森下子奈技	家畜繁殖学研究室
会計補佐	2年	正木美舟	
渉外	3年	三谷直子	家畜衛生学研究室
渉外補佐	2年	吉田博幸	
企画	3年	合田恵子	家畜衛生学研究室
企画補佐	2年	五味澤健作	
庶務	3年	伊藤　立	家畜飼養学研究室
庶務補佐	2年	須藤稔太	
編集	3年	飯田　京	家畜繁殖学研究室
編集補佐	2年	宮國科子	
監事		古川　徳	畜産物利用学研究室
		松岡昭善	畜産物利用学研究室
	3年	永山貴子	家畜育種学研究室
	2年	三本松良子	

第一回厚木キャンパス収穫祭事業報告

統一本部

第一回厚木キャンパス収穫祭での畜産学科統一本部の活動として、収穫祭宣伝活動、家畜苑、研究棟アート（北門装飾）、特別企画（ステージ企画）、体育祭、櫓装飾を行いました。その中で統一本部（統一委員長、副委員長）の活動として、各部門全体をまとめ、先生方と連絡を取り、世田谷キャンパス収穫祭実行本部、十三学科統一本部、また厚木キャンパス収穫祭実行委員会、農学科統一本部との連携を取り、厚木での初めての収穫祭を成功させようと走り回りました。特に今年は第一回ということで世田谷との兼ね合いや新キャンパスで前が見えない状況での準備は大変ではありましたが、統一本部全体をまとめ、一つとなって収穫祭を成し得たというのは来年の第二回につながる大きな力となることと思います。

特別企画

初の厚木キャンパス収穫祭ということで、今までやってきた世田谷キャンパスでのステージとは違い、学生だけでなく来客者にも参加してもらえる様な面白く、楽しいステージを企画・運営しました。

早くも、四月下旬から会議に会議を重ねました。そして厚木キャンパス第一発目の企画として、ステージ付近のお客さん・模擬店の人々を巻き込んで踊った『Dance×3』はなかなかの盛り上がりを見せ、その後も世田谷キャンパスでも大人気の男性が女性に扮し美を競う『美人コンテスト』や、定番の『ミスコン』、身近な食材をテーマにした『プチ講座』、先生方も参加した『陽気な畑の歌謡祭』や農大学生ミュージシャンによる『おはよう!Sunrise Music Party』等も大変盛り上がりました。

厚木キャンパスでのステージ企画をやりながら、後日世田谷キャンパスでのステージに出演するための舞台練習もしていました。

世田谷のステージでは、企画進行及び舞台出演も行いました。



宣伝隊

九月中旬から、十月十四日に経堂の農大通りで行う経堂パレードに参加するための神輿を作り始めました。畜産学科は他学科とは異なり、毎年、木造の神輿を作っています。経堂パレードでは、各学科ごとに作った神輿を担ぎ、地域の方々へ収穫祭を宣伝するとともに、それぞれの神輿の出来を競い合います。

九月末から十月には、休日を利用して、本厚木駅前でのビラ配布、本厚木・海老名駅で全学応援団によるリーダー公開と、野菜の無料配布を、その他複数の駅でもビラ配布を行いました。厚木キャンパス・けやき前においても、円陣青山ほとりを踊り、学生へ向けて収穫祭のアピールと参加の呼びかけを行いました。

収穫祭の当日には、ステージにおいて農大名物である野菜の無料配布を行い、多くの来客者に喜んで頂きました。



体育祭

体育祭といえば、各学科対抗の応援合戦である。我が畜産学科では伝統の、空手の動きを取り入れたものを舞う。

八月中旬より、この応援合戦の舞制作にとりかかる。過去の舞などを参考にして、練りに練り、より完成度の高いものを作り上げる。

九月に入ると参加者を募集し、練習をはじめる。団長を中心に、副団、団員という構成で、夕方から深夜にかけて行われた。練習の合間には他の部門を手伝った。

十月の下旬から全体の通し稽古を行ったが、舞には「流し」という花形の動きがあり、この動きの完成度を高めることが最も難しく、全体の出来にも響く。総勢三十名以上の団員全員の心と身体の統合があって初めて舞が完成することになる。

十一月四日、本番が終了すると、皆歓喜し、涙を流す者もいた。

体育祭は毎年、世田谷に乗り込む。体育祭、いや応援合戦の感動をその目で、耳で、その体で感じて頂きたい。



櫓装飾

「櫓」とは、体育祭最中に各学科の競技参加者待機所、または応援席として機能し、いわゆる陣地みたいなもの、高さ約5M×幅約9M×奥行き約3Mの高台です。櫓には、学科のカラーを表した絵を描きます。

九月上旬から、絵の図案を考え、下書きを基に櫓自体に描いていきました。



研究棟アート

収穫祭中にはいろいろなイベントがステージで行われました。そのステージからよく見える研究棟の壁を、来客者や自分達が楽しい気分になれるように楽しく、かわいく装飾するのがこの部門の仕事です。

九月上旬から準備をはじめ、発砲スチロールや布、綿、風船などを使って大きなキャンバスに絵を描くように仕上げました。





また今年は、世田谷キャンパス北門の装飾も今までどおり受け持ち、研究棟アートと同時進行で行いました。

家畜苑

家畜苑とは簡単に言ってしまえば「ミニ動物園」。但し、展示するのは家畜動物である水牛・肉牛・乳牛・山羊・リャマ・豚・家禽などです。

九月下旬から、収穫祭期間中に動物たちを迎え入れるための準備を始めました。家畜苑出入り口となるアーチ、動物舎、餌や備品を置いたり常時動物の監視を行うための本部を、鉄パイプ・木材等を使って組み立てました。また、動物舎には動物の背景になるようなバックボードも描きました。



第一〇九回 世田谷キャンパス収穫祭結果報告

前夜祭・特別企画
それいけ農大大集合……特別賞
野外劇ＰＡＲＴⅢ……銅　賞

体育祭
総合順位……優　勝
競技の部……優　勝
応援の部……準優勝

東京農業大学農学部畜産学科 〝畜友会〟会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。
(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発行
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。
(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員並びに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。
(1)会　長　1名
(2)副会長　2名
(3)執行委員
委員長　1名
副委員長　2名
書　記　2名
会　計　2名
渉　外　2名
企　画　2名
庶　務　2名
編　集　2名
監　事　4名

第七条(1)会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の

時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条(1)本会には連絡委員を置く。

(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行意委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条　役員および連絡委員の選出および任期

(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2)新執行委員会は、現執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、他の1名を2年次生より選出するものとする。

尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4)連絡委員は、各学科〔1、2年次〕および各研究室〔3、4年次〕で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章　総会

第十条(1)総会は定期総会と臨時総会とする。

(2)総会は正会員および特別会員をもって構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条　総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条(1)総会は正会員および特別会員の4分の一以上の出席により成立する。

(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員数の五分の一を上限とする。

(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条　定期総会は次の事項を決議する。

①前年度の事業報告および収支決算報告
②次年度の役員
③次年度の事業計画および収支予算
④会則の改正
⑤その他

第十四条　総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条　議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条　総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章　執行委員会および連絡委員会

第十八条(1)第六条(3)の執行委員は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条　執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が務め、出席者の過半数により可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条　執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条　執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文書で必ず報告する。

第二十二条　連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。
①執行委員会で決定した事項の伝達。
②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席する事ができる。

第二十三条　本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章　会計

第二十四条　本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以てこれにあてる。
但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取消しの場合はその限りではない。
(2)会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条(1)第4条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。
(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。
(3)編集委員会の責任者は編集委員の内1名が担当する。
(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任をもって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条(1)第4条(5)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。
(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。
尚、内規は別に定める。
(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は随時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを施行する。

各部門委員長より

『道産子物語』～どさんこストーリー～

統一本部委員長
三年　登　健　太

私は北海道の別海町出身である。やや小さめの体で酪農家の家に生まれ、保育園の3年間、小学校中学校の9年間、高校の3年間、そして大学に入り早くも4年目を迎えようとしている。小学校と中学校の記憶はもう薄れつつあるが、高校生時代と現在の大学生活は実に楽しく過ごさせていただいている。私は農業高校出身（別海高校酪農科）なので、農業クラブ三大行事と言われる、意見発表大会、技術競技大会、実績発表大会等に参加し、東北海道大会、全道大会、全国大会に出場させていただいたこともある。また、学校をあげての学校祭では、仮装パレードの山車作り、模擬店の準備など友人達と楽しくやった。

その後、98年に東京農業大学畜産学科に入学し、あっという間に3年が過ぎた。勉強の難かしさ、試験期間のつらさに涙し、友人達のやさしさに触れた。あっという間に月日が流れていくことの要因として、収穫祭への参加が上げられる。その当時、私達（現在の3年生）は、厚木キャンパス一期生ということで、先輩も後輩もいない状態であった。厚木キャンパスは、さみしく、つまらないものであったが、縁があって畜産学科統一本部の収穫祭準備活動に参加させて頂いた。毎日、授業が終ってから世田谷に通い、終夜作業で、家畜苑の準備・体育祭応援合戦の練習等を行っていた。私は、体育祭の応援合戦に参加したので、毎日筋肉痛と戦いながら練習し、本番を迎えた。極度の緊張と熱気に燃えながら舞い完全燃焼できた。二年生では、副統一委員長、応援合戦の太鼓をやり、三年生では統一委員長として任務を遂行しなければいけないのだが初めての第一回厚木キャンパスの収穫祭ということで上手に運営していくことができなかった。

いずれにせよ、私達が携わった収穫祭は、様々な不満があったとしても、私の中では大成功であると言い切らなければならない。なぜなら、不満が残る後輩は、次の年がある。そして、私達の様な引退していく者は、やるだけのことはやった訳であり、その結果はどうあれ、その自分を誉め讃え満足すべきであると思うのである。

今になって、実家に帰省した際、「農大学報」が家に届いていた。父に「おまえは、裸踊りをしているのか?」とか「おまえをイベント委員をやらせるために大学へ行かせたんじゃないんだぞ」と言われても後悔はしていない。

とても楽しく、とても苦く、それでも人を魅了する収穫祭。たくさんの仲間に囲まれて過ごした日々は一生忘れない。

私に残された最後の一年。この一年もまた、昨年入った家畜繁殖学研究室での卒業論文等に追われ、あっという間に卒業していってしまうのかなぁ〜。

20年を振り返ってみようと思ったけど、結極、高校生以降の話しかできないものですね。そして、身近な収穫祭について熱い思い入れがあったということ、分かっていただけたでしょうか？（祭り好きっていう噂もチラホラ）

ここまで楽しく生きて来られたのも、熱くなれたのも、両親の理解、すばらしい恩師のご指導、そして、兄、姉の様な先輩達、弟、妹の様な後輩達が居たから出来たということを忘れません。

最後に、いつも一緒で楽しくやれた同期のみんなへ、10年後、20年後、100年後（？）も、一緒に酒を喰らって記憶飛ばして大笑いできたらいいね。



特企やっと終了

やりたいコト 楽しむコト 無限大∞

前夜祭・特別企画委員長
三年　鈴木明子

厚キャンで過ごし、育ち、やっと…ついに実現した**『第一回厚木キャンパス収穫祭』**長かった、アタシ達が居るうちに実現するなんて思ってもいなかった。期待はしていても、心のどこかで無理だろうと思ってた。

それが実現したんだ。何もかも真っ白で、ううん、色なんてない、無色透明の台本を渡されたんだ。戸惑って、悩んで、研究して、会議して。何でこれ程までに働いても何一つまともに形にならないのだろうかと苛立った。今まで、特企一筋でやってきて嬉しいとか、悔しいとかで色んな涙流したけど、やりたいのに何から手を付ければいいのか分からなくなって、身動きがとれなくなって虚無間に襲われる時のやつは、本当に嫌だった。「泣いても何一つ進みやしないじゃない」っていつも思ってた気がする。

ただ一つの救いは、待っていてくれる人がいるって事だった。仲間・後輩・観客。それで、私がアタシになる。

泣いて弱気になんてなってる私が、アタシになれる。そして楽しむんだ。何もかも。アタシは大変なのが心底楽しかった。（それはもちろん、一緒に頑張ってくれる大切な仲間がたくさんいたから。）泣いて、悩んで、喧嘩して、そして笑って、充実してた。そして怖かった。

当日は、どんな客層なのか、厚キャンの学生のノリはどんなものなのか、アタシ達が必死で創りあげてきた。このステージへの反応はいかなるものか、常に不安だった。

でも、ホント、今まで何度もステージに立ってはきたけど、こんなに怖くて、楽しかったのは初めてだった。“ダンス×3”“農大生の主張”最高だった。Liveを痛感し、満喫した。みんなが最高だった。あんなステージは、もう二度と、どんなプロがやったって絶対に無理だと思った。別に自我自賛してるんじゃない。ステージに立った人間は分かると思うが、ステージの良し悪しって自分が上手く出来たとか、そんなちっぽけな範囲のコトじゃない。下から湧きあがるエネルギー（観客）と仲間と爆発するエネルギーが融合しあった時のあの感覚、忘れられない。今思い出しただけでも、背中がゾクゾクする。

まだまだ、もっと楽しくできるよ。洋子、頑張れ。こんな、やりたいコトだらけで、委員長らしくなく誰よりも楽しんじゃってるアタシについてきてくれて本当に感謝してる。アタシには勿体ない程のかわいい、大切な後輩だよ。一一〇回、協力できるコトがあれば何でもやるから。でも、頼らずに、洋子にしか創れないステージを見せて下さい。期待してるから。

そして京ちゃん、アリガト。我儘きいてくれて、協力してくれて。ミスコンぐらいでしか力借せなかった事、世田谷の方かなり手薄だったこと、私が委員長でやりずらいと思わせるコト心よりお詫び申しあげます。そして畜友の皆んな、こんな奴でスミマセン、そして**心より感謝**してます。

みんな、やれる事楽しむ事に制限、勝手に自分で決めたらそこまでなんだ。ずっとずっと上を目指してもっともっと楽しんで、みんなら出来る。頑張れ。



二年目の宣伝隊

宣伝隊隊長
三年　三谷直子

そもそも宣伝隊とは、収穫祭前の一ヶ月間（ほとんどの土日祝日）をいろいろな場所に出向き、おばちゃん達に無料で大根を配ったり、大根おどりを含むリーダー公開をしたりして収穫祭を宣伝する部門である。

今年は、はじめての厚木キャンパスでの収穫祭だったが『宣伝隊』という部門はほぼ今まで通り世田谷の宣伝隊と一緒での活動だった。準備期間中は、昼は厚木で授業、夜は世田谷で作業、もちろん電車の中は爆睡と、なかなかヘビーな生活だったが、世田谷にたくさんの友達もいたし、厚木宣伝隊のみんなも仲良しで、ほんと楽しい毎日だった。よくよく思い出してみれば、厚木学内宣パレでモメたり、ちょっとハメはずしすぎて怒られたりして、かなりヘコんだ気もしないではないが…。

15学科から集まった学科宣伝隊約40人は、家族みたいなものになり、一緒にいなくなった今はとても寂しく思う。

この部門をやってもう一つ得たものがある。宣伝隊のみんなという楽しさと、たくさんの人に接することで『笑顔』が上手くなった。決してつくってるわけではなく、あくまでも自然な笑顔をつくれるようになった。結局はつくってるのだが、とりあえず自然な笑顔なら悪い印象は与えないし、結構使えるのである。表情が堅い人は宣伝隊に入ってみてはどうだろう？ステキな笑顔をモノにできると思われる。

最後に、よく出来た後輩である、宣伝隊副隊長のミッフィーと宣伝隊神輿隊長のとしたに一言。

「いろいろありがとね。来年は自分達の個性を出して今年とはまた違う宣伝活動を期待してるよ」



学科宣伝隊神輿モーグリ♡



厚木収穫祭で配布する大根の袋づめ作業

神輿

神輿隊長
二年　須藤稔太

押忍、私、第一回厚木キャンパス収穫祭、ならびに第一〇九回世田谷キャンパス収穫祭本年度畜産学科統一本部宣伝隊神輿隊長を務めさせていただいた須藤稔太です。

えー今年は、厚木で神輿を作り、世田谷まで運び、農大通りで、担ぐというなんとも奇妙な事を行いました。

今年は、二年生が中心となって作ったという事もあり、てんやわんやで、作って行きました。最初は何をやっていいのかわからず、本当に苦労しました。何も進んでいないのに、時間だけが過ぎていく事もありました。その中で、仲間と話し合って『あーしたい、こーしたい』というのを聞きながら、なんとか一つのものを作りあげていきました。

本当につらかった。でも、楽しかった。面白かった。担いだ後の達成感はとても大きなものでした。やはり、自分達が作ったものが形として、残るのはいいもんですね。来年もまた神輿、作ります。今年よりもいいものを。

最後に、手伝ってくれたみなさん、本当にありがとうございました。特に、立川悠々、三本松良子、宮國科子、柴田彩子、横川暁士、この五人には本当に感謝しています。また来年もヨロシク。この文章読んでくれたキミも作ってみないかい。面白いよー。



オイッサ!! オイッサ!! オイッサ!! オイッサ!!

体育祭バンザイ!!

体育祭委員長
三年　渡　辺　靖　仁

昨年、我々畜産学科は総合優勝という快挙を成し遂げた。

自分は副団長として参加していた。その時は素直にうれしかった。しかし、事の重大さに気づくまでにそう時間は、かからなかった。

「総合優勝?」「来年だれが団長やるの?」「俺?」外を見れば他学科からの宣戦布告の嵐。内を見れば先輩○Bからの重すぎる期待。泣きそうでした…。平気なふりしてたけど泣きそうでした。

時の経つのは早いもので「あっ」という間に第一〇九回収穫祭がせまってきた。

しばらくの間、現実逃避していた私は、「応援の練習いつから始めますか?」という無邪気な後輩の一言によって現実にもどってきました。焦りました。人生で一・二を争うぐらい焦りました。「もうやるしかない!」

がんばりました。とてもがんばりました。統一本部のみんなもきびしい応援練習についてきてくれました。みんなの一生懸命さは、焦っていた自分を落ち着かせてくれました。「厚木から、世田谷の体育祭に何人参加してくれるだろう?」その不安も研究室を中心に八十二名の人たちが参加して下さいました。この勢いで乗り込んだ体育祭

畜産最強伝説は生きていた。

競技では一位連発!特に棒引き（女子のみ）では昨年に引き続き圧勝。先生がんばって♥では、桑山先生、河野先生を中心にダントツの一着でした。

そして一番力を入れて練習してきた応援合戦、練習中もできなかったすばらしい舞いでした。結果は二位でしたが、そこに行き着くまでの過程で大満足でした。

そして当然のごとく総合優勝!。

自分の人生の中でこれほど感動したことはありません。

こんな感動を与えてくれたみんなに感謝しています。

みんなありがとう。体育祭バンザイ!!



『収穫祭』

櫓装飾委員長
三年　合　田　恵　子

激動の世紀末、第一〇九回収穫祭終わりました。

第一回厚木収穫祭も開催され、真の節目といえる年でした。

私の担当した櫓とは、体育祭の時にグランドに組み立てた舞台の事で、その上で応援をしたり休憩をしたりします。毎年、各15学科が装飾を競い合うのです。昨年、一昨年と準優勝、優勝と好成績を得ていたこともあり、プレッシャーと同時に、優勝できるだろうと、考えていました。三年間自分の好きな様に、好きな絵を描いてきて、一番良いものが描け、自信がありました。しかし、結果は5位。聞いた瞬間は、信じられず、思わず涙が溢れて止まりませんでした。一ヶ月以上も時間をかけて頑張ってきたのに!

しばらく時間が経つうちに次第に、なぜこんなに悔しいのかが分かってきました。自分一人だけでなく、一緒に頑張った後輩と仲間の分も悔しいのだと。この一ヶ月間、辛い日々でしたが、後輩と仲間がいる今が、三年間で、一番楽しかった。一番充実していました。

賞がとれなかったことで、大切なものを教えられました。感謝したいです。気づかせてくれた数多くのものに。多くの仲間に支えられ、私は今ここに有るんだと。

私は、一生涯、この三年間を収穫祭に費やした事を忘れない。



装飾活動を終えて

北門装飾・研究棟アート委員長
三年　岡　阿有美

私の収穫祭参加のきっかけは、友達に「炊きだしの人手が足りないから、炊きだしだけでいいから手伝って。」と言われたことです。

そんなきっかけで参加しはじめた私ですが、気づいたら、『北門』という不思議な空間にはまっていました。

装飾は、体育祭などのように、順位などで結果がはっきり出るわけではないので、装飾そのものよりも、仲間と協力して作ること自体が大事なんだと私は思いました。

昨年までは、ただ先輩について行けばいいだけで、ワイワイ・キャーキャー騒いでいました。（先輩ごめんなさい）。でも、今年は三年の自分たちがリードしなくちゃいけないと思うと胃が痛くなりました（そうゆうことが苦手なので…）。

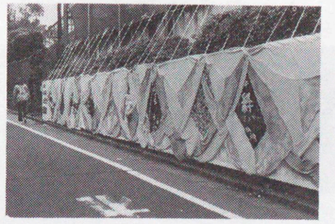
しかし、私には、とっても頼りになる仲間と、とってもしっかりした後輩がいました。私が今年の収穫祭をのりきることができたのは、周りのみんなのおかげです。

みんな、ありがとう!!（特に、タカには本当に感謝してます。）

こんなすばらしい仲間との出会いをくれた収穫祭に感してます。ありがとう収穫祭。

後輩のみんな、来年に期待します。いいものを作ってねっていうより、いい雰囲気の中で作って下さい。

北門装飾



研究棟アート



家畜苑にありがとう

家畜苑委員長
三年　伊　藤　　立

自分は勉強が嫌いで、それが楽しめたことは一度もない。ただ、学校には部活動、サークルなどの課外活動が存在するから、それがやりたくて通うだけのことである。

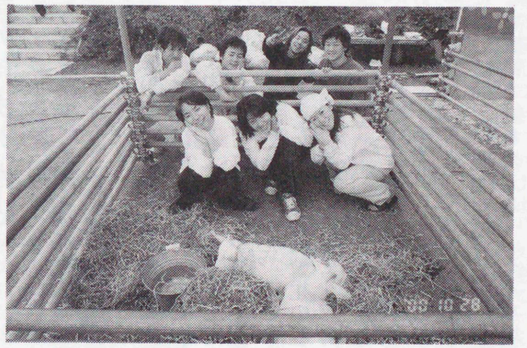
入学一年目の秋も本番となったある日、先輩に誘われ、自分は畜産学科統一本部に入部した。そこで家畜苑のスタッフとしてやってきたが、技術練習生の経験がなく、また脳力、体力、技術力全てが他人に比べ劣っている自分が上に立つとは思ってもいなかったし、立ちたくもなかった。だが、気がついたら家畜苑委員長になっていた。それは自分にとって、あまりにも重くのしかかる役目であり、器の小さな自分にとっては大変な経験であった。

家畜苑について簡単に説明するなら、「普段触れ合う機会の少ない家畜と触れ合える」。そんな場所である。その家畜として挙げられるのは、牛、水牛、豚、山羊、ラマ、鶏などであり、例年それらを展示していて、今年も昨年に引き続き、ラマとひよこの人気が高かった。例年ならば水牛に乗ることができ、展示家畜には一通り手を触れることができたと思うが、今年は北海道と宮崎県で発生した家畜伝染病「口締疫」、また、茨城県で発生した鳥類伝染病「ニューカッスル病」の影響で、全家畜において「目で触れる」家畜苑だった。だが、当初の予定ならば、家畜苑自体ができなかった。厚木キャンパスという初めての場所で、ただでさえ何も無いように感じるのに、それに加えて収穫祭で家畜苑を催す予定が組み込まれていなかったことは、あまりにも痛手であった。

しかし、このような状況でも、厚木キャンパスでの初めての家畜苑を作り上げるにあたって、後輩や畜友会のみんながんばってくれたおかげで、第一回目にしては良い家畜苑を催すことができたと思っている。昨年に引き続き、女の子たちが中心となってイラストをがんばってくれたため、家畜苑を見に来た方々みんなが絶賛するほどのすばらしく美しいバックボードが完成した。また、体育祭メンバーや、統一委員長、副統一委員長、その他の部門の人達も参加してくれて、自分としてはとても感謝している。特に統一本部OBの原先輩、佐々木先輩、得能先輩には、研究室で忙しいにもかかわらず、手伝って下さり、有難く思う所存です。心より感謝いたします。

正直言って、世田谷から厚木に移った家畜苑を、どれだけの方が見てくれるかがとても気がかりであった。しかし、厚木という場所、そして、キャンパスの裏手にもかかわらず、予想以上にたくさんの方々が見て下さった。厚木キャンパスでもその人気を確認できた家畜苑。畜産学科のメインイベントであるが、厚木キャンパスのメインイベントと言っても決して過言ではないと自分は思う。

最後に、近江先生を始めとする諸先生方、富士畜産農場の職員の方々、練習生、家畜苑に携わった全ての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



編集後記

「ふじみの」も今年で第37号を発行することが出来ました。

お忙しい中、先生方や先輩方そして同輩や後輩などの協力のもと、畜友会、収穫祭の活動などについて書いて頂きました。一昨年まで学科移転で先輩と後輩との間には今までにない距離感がありましたが、昨年より全学年が厚木キャンパスに集結し、今年においては無事に卒業生を送り出すことが出来ました。「ふじみの」第37号がこれからの厚木の発展を担うものになればと考えております。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたり原稿を書いて頂いた先生方、並びに会員の方々に厚く御礼を申し上げます。

編集委員代表　飯田　京

平成13年3月19日　発行
〝ふじみの〟第37号

編集委員　飯田　京
　　宮國科子
発行者　畜友会

神奈川県厚木市船子1737
発行者　東京農業大学畜友会
電話　046(270)6228

東京都新宿区改代町16
印刷所　㈱マイクロ印刷
電話　(5261)1001


102702
00 10 31

